

日本古代史ネットワーク 第15回 解明委員会

基本レポート

「水田稲作と弥生人」

2022年3月12日(土)

丸地 三郎

弥生時代の開始時期

季刊「古代史ネット」第2号(2021年3月)で発表した「弥生時代の開始時期」をベースに記す。

- この『弥生時代の始まりは500年遡った。』との説は、歴博が科学的年代測定法で計測した結果として唱え始めたもの。
 - 考古学会や考古学者達は認めず、異議を唱えているが、この説は、広く喧伝されており、異常な状況になっている。
 - 筆者は、2018年に「弥生時代の始りは500年遡らない!」とする文を発表し、異議を唱えた。
- 今回は、その論旨を整理して記し、加えて、新しく判明した歴博の年代測定の不合理を示すこととする。
 - しかし、異議を唱えるだけでは埒が明かないので、
 - 「弥生時代の開始時期」に、起きた歴史的事実を解明し、分析した。
 - 結果、開始時期は、従来通り、凡そ紀元前500年頃で、遡らないことを示した。

「弥生時代の開始時期」に起きた歴史的事実

1. 日本への水田稲作渡来が二度あったこと。
 - 二度目の渡来時期に「弥生の戦争」が発生していたこと
 - 最初(一度目)の渡来の当事者は、先住民である海洋性縄文人で、中国春秋の呉の難民を招聘し、その水田稲作の技術を用いて「最初の水田稲作」を行ったこと。
 - 二度目の渡来と水田稲作の当事者は、いわゆる弥生渡来民・倭人で、大陸から直接来た人々で、別の米の品種と新しい水田耕作を含む文化をもたらした。
 - 弥生渡来人は、ある時点で、北九州にあった海洋性縄文人の集落を襲撃し、弥生人の集落とし、縄文系の土器を廃止し、弥生土器に変更し、米の品種も、自分達が持ち込んだ別の品種に置き換えた。
2. 古代米の品種が、中国・朝鮮日本で、科学的・統計的に解明されたことにより、渡来した品種の源郷と類推される個所が判明した。
 - 一度目の品種は、中国春秋の呉に源郷があり、その品種の米が朝鮮半島に渡り、更に北九州に渡来したものの。
 - 二度目の品種は、山東半島の付け根部分の焦庄遺跡付近から来たものと目される。
3. 最初に行われた水田稲作:これを主導した海洋性縄文人は臨海地帯の水田耕作適地に居を構え、半農半漁の生活を送り、海洋性食料を多く摂る生活を営んでいたと推測される。
 - 海産物を多量に摂食することによって炊事用具・食器に海産物が付着することになる。
 - それが土器付着物となる。その土器付着物を炭素14年輪年代法で計測すると、海洋性リザーバー現象が発生する。
 - これが誤って、「弥生時代を500年遡らせる」要因となった。
 - 一度目の水田稲作は、中国春秋・戦国の呉が滅亡し、難民が朝鮮半島に移ったことが契機で、滅亡時期紀元前473年より後のことになる。
 - 従って、従前からの定説であった起源5世紀が正しい渡来時期と云える。
4. 二度目の弥生人渡来の時期は、従前からの土器研究から生まれた土器編年に従い、
 - 紀元前3世紀から紀元前2世紀を支持する。

日本の水田稲作に関する学説

- 日本の水田稲作に関する学説は、
 1. 「朝鮮半島から渡った」とする説は十分な根拠が有る。
 2. 「大陸から直接日本へ渡って来た」とする農学者の唱える説も十分な根拠が有る。
- どちらが正しいのか結論が出ていなかった。
- 今回の結論
 - それは、両方とも正しい。
 - 一度目の渡来は朝鮮半島経由で、二度目の渡来は大陸から直接。
 - 一度目に渡来した米の品種が駆逐され、二度目に大陸から来た品種に置き換えられた。
 - このように理解すると、稲作起源の問題が氷解する。

I. 弥生時代の始まりは 500年 遡らない！

- 問題を簡略に整理し直して記す。
- 『2003年5月に、国立歴史民俗博物館(通称「歴博」、千葉・佐倉市)は、九州北部や韓国の弥生早期から前期の土器を炭素14年代測定法のAMS 法によって計測し、その結果、弥生時代の始まりは、定説より約500年古い、紀元前 10世紀とする新説を発表した。』
 - ここからこの問題はスタートする。
- 歴博の一連の計測結果とその発表に対して、考古学者達が、基礎データを示さない発表の仕方への非難や、計測結果を海洋リザーバー効果の影響とみる批判などが集中して行われた。
- それに対応するため2005年に、『総研大文化科学研究』に、藤尾 慎一郎氏・今村 峯雄氏・西本 豊弘氏の共著として、「－AMS－炭素14年代測定による高精度年代体系の構築－」を発表し、反論した。
 - 「この問題に対する私達(歴博)の考え方と、海洋リザーバー効果の影響をどのように認定しているのか説明しておこう。」
 - 「海洋リザーバー効果の影響の有無は、その試料の $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ の値、炭素／窒素比を調べて、総合的に判断する。」として、海洋リザーバー効果の影響はないとの見解を記している。(有効性が十分に認められていない手法)
 - 更に、本文ではないが、注2)において、
 - 『ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。』
 - と海洋リザーバー効果の影響排除を断言している。
 - この論文の注2を次に示す。

歴博(国立歴史博物館)の論文のタイトルと注2)の全文

{ 論文名と著者 }

『弥生時代の開始年代 —AMS—炭素14年代測定による高精度年代体系の構築—』

学術創成研究グループ 藤尾 慎一郎・今村 峯雄・西本 豊弘

{ 注2)全文 }

- 注2)なお、海洋性の魚介類を調理したものが試料である場合が考えられ、データの解釈には注意が必要である。魚介類は海水中のプランクトンを捕食することによって炭素を取り入れる。一般に海水中の炭素14濃度は大気中に比べると低いことが知られているが(食物連鎖の底辺にあるプランクトンはこの海水中の生物なのである)、大気と接している厚さが70mほどの海洋表層水は大気と炭素(二酸化炭素)のやりとりをしており、炭素14濃度の差はそれほどではない。
- しかし表層水と中層水・深層水は容易に混ざらないので、大気と接していない中層水と深層水は古い炭素を有し炭素14濃度がさらに低い。また深層水は2000年以上の長時間をかけて大洋底を移動し、高緯度地帯において上昇して表層水と混ざることが知られているため、高緯度地帯の表層水中の炭素14濃度は低く、オホーツク海では1000年も古く出るというデータがある。
- 日本海においてはこのようなデータがないため未知数だが、海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性がある。試料としては避けたほうがよいという意見もある。
- ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。
- 2003年7月までに研究グループが提示した調査内容のなかにはこの点に関して言及していなかったために西田茂氏の批判をうけることとなった〔西田2003〕。
- しかし後述するように歴博が2003年5月に示した11点のデータには三つの理由から海洋リザーバー効果の影響はみられないことを反論した〔藤尾・今村2004〕。これについては後述する。

1) 歴博の反論で断言したことが、正しく行われたか、検証する。

『海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は
原則として測定の対象としてこなかった。』

と断言が、正しいのか否かを検証する。

- この排除されるべき試料の条件を検討してみる。
 - この注2)の中で、「海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性があるので、試料としては避けたほうがよいという意見もある。」としている。
 - この文章から、「海産食料に多く依存する」古代集落を、地理的条件として、「海岸に接して立地する遺跡」とする。
- 検討に当たっては、「海産食料を多く依存する」要件を満たすものとして、『容易に海産物接取が可能な』、海岸線から1km以内の集落、又は、河口から数km以内の川に面する集落とする。
- 『検討対象とする遺跡』
 - 上記の論文「－AMS－炭素14年代測定による高精度年代体系の構築－」に
 - 考古学的調査の項目で「較正年代を考えてみよう」と挙げられた藤尾氏外の前記論文中で測定結果のグラフ等を挙げて示された
 - 「菜畑遺跡、梅白遺跡、雀居遺跡、那珂君休遺跡」の4遺跡を検討の対象とする。

『検討対象とする遺跡』



- 菜畑遺跡-----①
- 梅白遺跡-----②
- 雀居遺跡-----⑨
- 那珂君休遺跡---- ⑧

2) 雀居遺跡と那珂君休遺跡について検討

これを見ると地形は現在のもので、「点線」で示されたラインは、縄文海進時の海岸線として示されている。

一般的には、**縄文海進**の最進時期は、**6～7千年前**の時期で、その後、海岸線は退いている。

この常識に基づき、この現在の地図をしてみると、雀居・那珂君休遺跡は、縄文海進の海岸線から3km程度、離れており、海退したはずの弥生時代の海岸線からは、更に遠く離れ、『海岸に接して立地する遺跡』では無いように見える。

同一の地図は、1994年12月に第四紀研究で発表された「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」当時九州大学理学部の下山正一著に記載されている。下山氏はこの**海岸線は縄文海進の最も海進の進んだ時期のもの**としている。

続いて、この海岸線について述べている記述がある。(財)九州大学出版社1998年発行の「福岡平野の古環境と遺跡立地 -環境としての遺跡との共存のために-」の第4章に「博多遺跡群をめぐる環境変化 -弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか」著者は、磯望・下山 正一・大庭 康時・池崎 譲二・小林 茂・佐伯 弘次。

この論文では、**この海岸線の時期**を見直し、「14C年代で、3,190年前から2,580年前の間となる。」と記し、「堆積物の厚さなどを考慮すると、その年代は**約3,000年前**で、数百年の誤差をもつものと判断された。」と結論づけている。

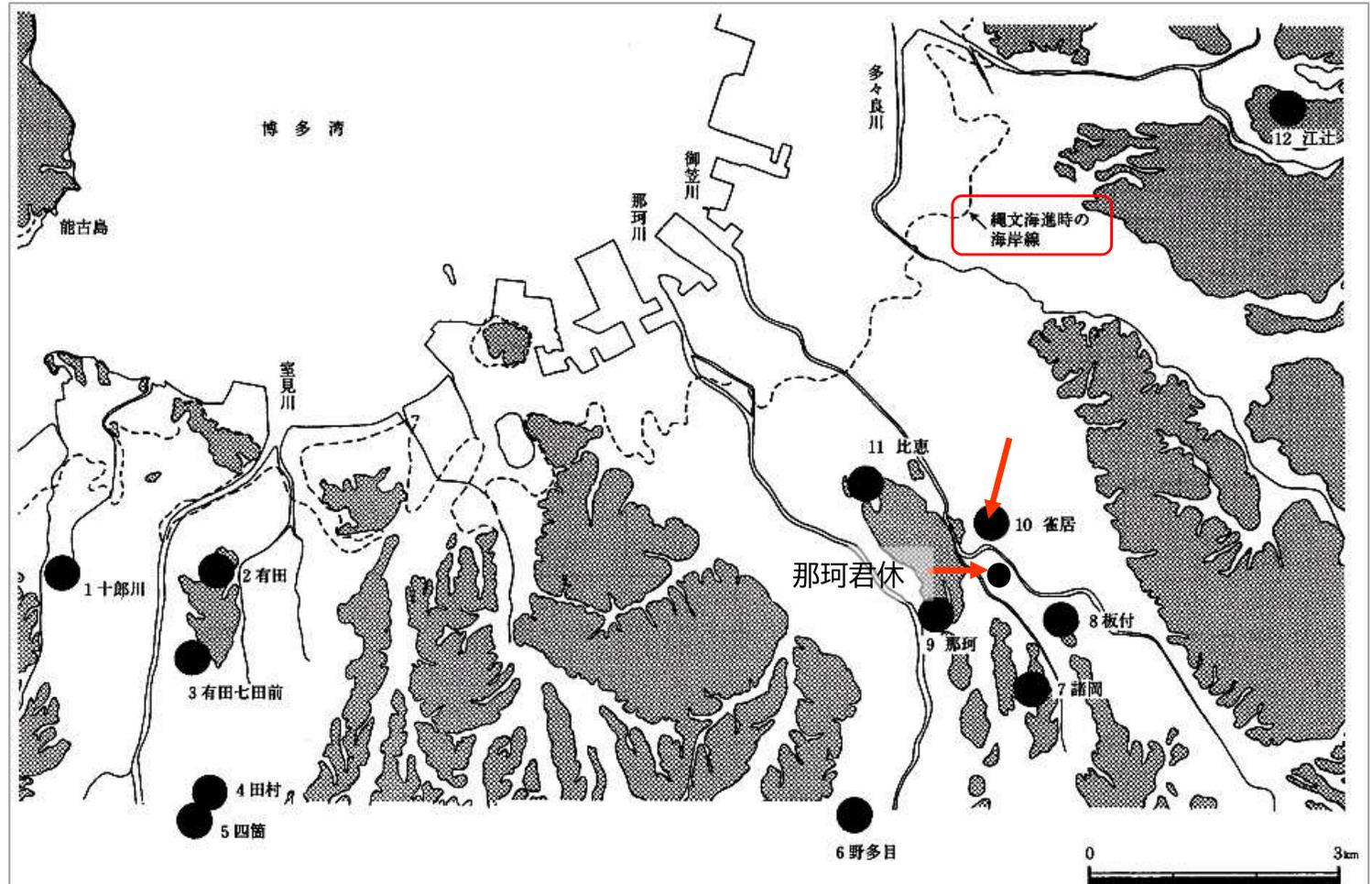


図12 福岡・早良平野における弥生早・I期の遺跡分布図 [小林・磯・佐伯・高倉編 1998] から作製

「1999年3月暦博研究報告」中の論文・藤尾慎一郎著「福岡平野における弥生文化の成立過程」の図（那珂君休遺跡追記）。

博多湾では、最も海進が進んだ時期は3000年前

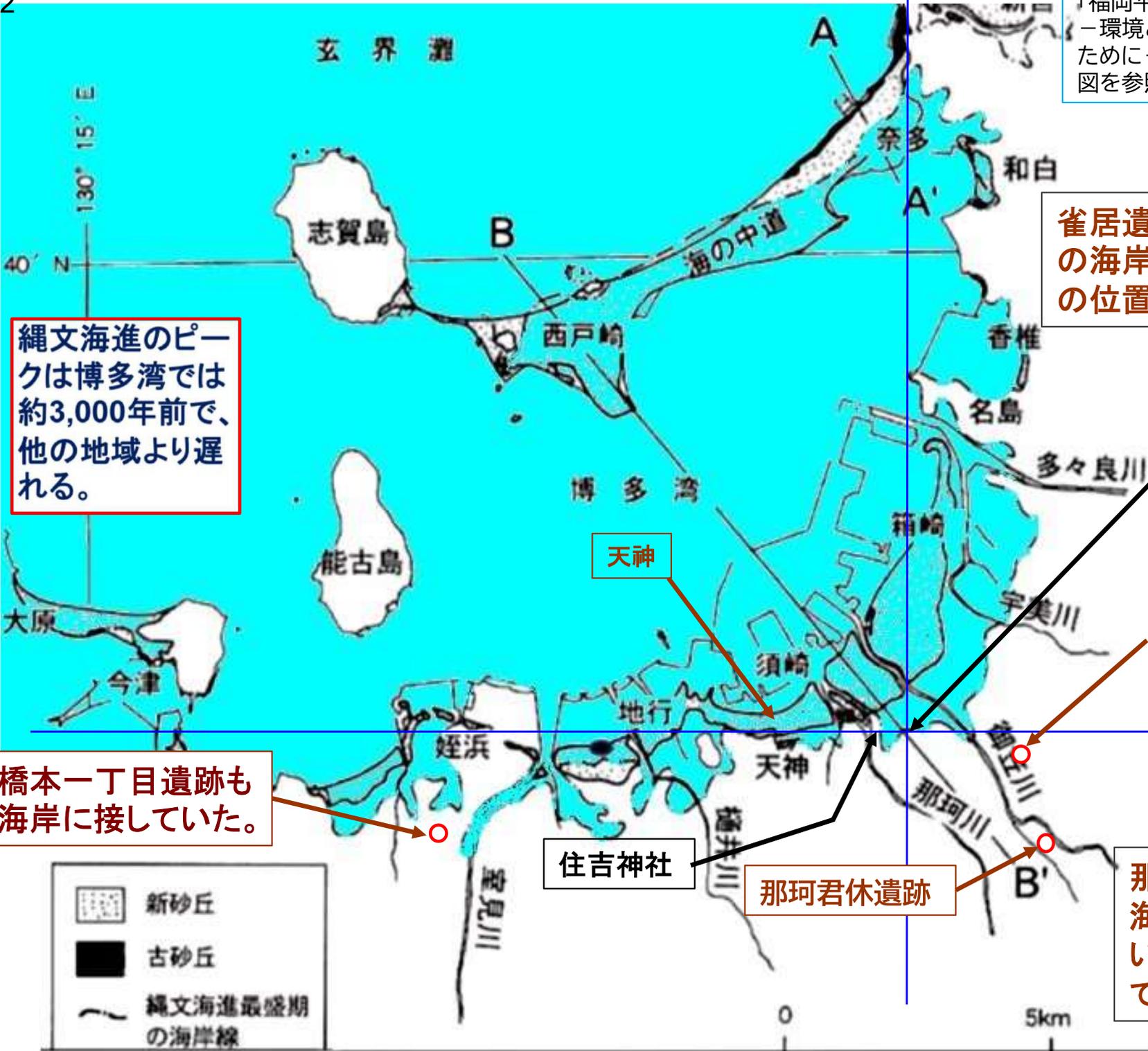
- 一般的には、縄文海進の時期は、6～7千年前の時期で、その後、海岸線は退いている。
 - この常識に基づき、この現在の地図を見てみると、板付遺跡は、縄文海進の海岸線から4km程度、離れており、海退した弥生時代の海岸線からは、より遠く、離れるものに見える。従って、明らかに『海岸に接して立地する遺跡』では無いとする見方も頷ける。
- 1994年12月に第四紀研究で発表された「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」当時九州大学理学部の下山正一著に、明瞭な地図情報が記されている。
 - 下山氏はこの海岸線は縄文海進の最も海進の進んだ時期のもので、博多湾ではその時期は4千900年前だとしている。この海岸線図は、歴博の図12の海岸線とほぼ重なる。
- 続いて、この海岸線について述べている論文がある。(財)九州大学出版社1998年発行の「福岡平野の古環境と遺跡立地 —環境としての遺跡との共存のために—」
 - この第4章に「博多遺跡群をめぐる環境変化 —弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか」著者は、磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次。
 - この論文では、この海岸線を「14C年代で、3,190年前から2,580年前の間となる。」と記し、「堆積物の厚さなどを考慮すると、その年代は約3,000年前で、数百年の誤差をもつものと判断された。」と結論づけている。(頁107)
- 縄文海進時の海岸線は、実は、約3000年前のもので、歴博が表明した弥生時代の開始時期のものであった。
 - 博多付近の地殻は変動があったようで、縄文時代の海面高さは、他の地域と異なる動きをしており、注意が必要だった。



埼玉県立熊谷図書館



「福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—」に記された海岸線の地図を参照して、色付けした地図



縄文海進のピークは博多湾では約3,000年前で、他の地域より遅れる。

雀居遺跡は、3000年前の海岸線から1Km未満の位置にある。

橋本一丁目遺跡も海岸に接していた。

博多駅

雀居遺跡 (福岡空港)

住吉神社

那珂君休遺跡

那珂君休遺跡は、海岸線にはやや遠いが数Kmの範囲で、河川に面す。

天神

那珂川

5km

約3000年前の海岸線

縄文海進時の海岸線と示された線は、丁度、歴博の弥生開始時期とする約3000年前の海岸線であったことになる。

海産貝類の調査から判明した海岸線は、更に内側にあった。

歴博の主張する年代が正しいとすると、この海岸線がその時代の海岸線になる。

雀居遺跡と那珂君休遺跡は、この海岸線から3km未満の川沿いの遺跡で、
『容易に海産物接取が可能な』地域に存在する。

懸念された『海岸に接して立地する遺跡』そのものとなる。

3) 菜畑遺跡・梅白遺跡 について検討

- 菜畑遺跡付近の地図を確認すると発掘現場から海までの直線距離は約900m。これだけでも、臨海遺跡と云える距離。
 - 古砂丘は、縄文海進後に砂が堆積したもので、縄文時代中に堆積したもの。
 - 新砂丘は、それ以降に砂が堆積したものと考えられており、弥生時代・古墳時代の遺跡は発掘されない。
 - 従って、弥生時代初期の海岸線は、古砂丘列と新砂丘列の境にあったものと推定される。
- 菜畑遺跡から海岸までは、古砂丘を越えることになるが、地図から読むと距離は500m以内になる。
- 梅白遺跡も海に近く、現在の地形でも、海から川に沿って2km以内で、川に面している。
- 弥生時代初期には、やはり古砂丘まで海が来ていたと考えられ、海・河口から1km強の距離にある「海岸に接して立地する遺跡」になる。



図3 旧海岸線・砂丘列地形分類図 (1/100,000)

結論：

- 古代の地形図・地質図の示す海岸線からの距離を調べてみると、
 - 「菜畑遺跡、梅白遺跡、雀居遺跡、那珂君休遺跡」の全ての遺跡は、
 - 今からおよそ3000年前又は弥生時代初期には、
 - 海岸から1km未満、2km未満、河口から2-3kmの川沿いと云う立地であり、
 - **4か所、全ての遺跡は、「海岸に接して立地する遺跡」であることが判明した。**
- 2005年、藤尾 慎一郎氏・今村 峯雄氏・西本 豊弘氏の共著として発表された論文「－AMS－炭素14年代測定による高精度年代体系の構築－」で
 - 批判に反論した材料としてあげられた
 - 「菜畑遺跡、梅白遺跡、雀居遺跡、那珂君休遺跡」の全ての遺跡が、
 - 『ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。』
 - **として除外されるべき遺跡で、海洋リザーバー効果影響の可能性のある遺跡だあることが判明した。**
- 従って、
 - 測定に使用してはならない試料を、
『炭素14年代測定法のAMS法によって計測』、
 - その結果、導き出された
 - 『弥生時代の始まりは、定説より約500年 古い、紀元前 10世紀とする新説』は、
直ちに、破棄されるべき説である。

II. 一カ所の遺跡で複数の土器・木杭が計測された歴博の調査事例

科研報告: 弥生農耕の起源と東アジア - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築 - 近畿の弥生前・中期の年

3 堰(せき)跡(あと)の年代

大阪府牟礼遺跡は1985年に茨木市教育委員会が発掘調査し、縄文晩期の突帯文土器の時期に属する堰跡として当時、大きな話題になりました。しかしその後、類例が見つからなかったこともあり、最近ではとりあげることがなくなっています。そこで、炭素14年代を測定し、問題の解明をはかりました。その結果は次のとおりでした。

堰の杭1：前595年～前405年(61.3%) 堰の杭2：前795年～前515年(95.4%) 堰の杭3：前595年～前400年(70.8%) 縄文晩期土器：前800年～前735年(48.0%)、前690年～前660年(16.0%)、前650年～前545年(31.5%) 1条突帯文土器：前830年～前750年(84.2%) 弥生前期土器：前785年～前505年(92.8%)

問題の堰をつくっていた杭の年代は3点のうち2点が前6～前5世紀、1点が前8～前6世紀で、弥生前期土器の年代と重なる一方、1条突帯文土器は前9～前8世紀を示し、杭すなわち堰の年代は弥生前期まで下る可能性が高いと判断しました。

兵庫県伊丹市岩屋遺跡は、2003～04年に兵庫県教育委員会が発掘調査をおこない、弥生時代の堰跡が見つかりました。出土土器から弥生前期と推定されましたが、他機関が堰に使っている杭の炭素14年代の測定した結果では前3世紀後半であったので、時期比定に問題が投げかけられました。

そこで、現地においてPG液がかかっていない個所から新たに試料を採取して測定しました。

その結果、堰1は前430～370年で前400年頃を中心とする前期末、堰2は前390～前350年で前400年をやや下る前期末ないし中期初め時期または前290～230年で前200年頃の弥生中期中頃、護岸施設は前485～前405年で前400年頃の前期末と判断しました。

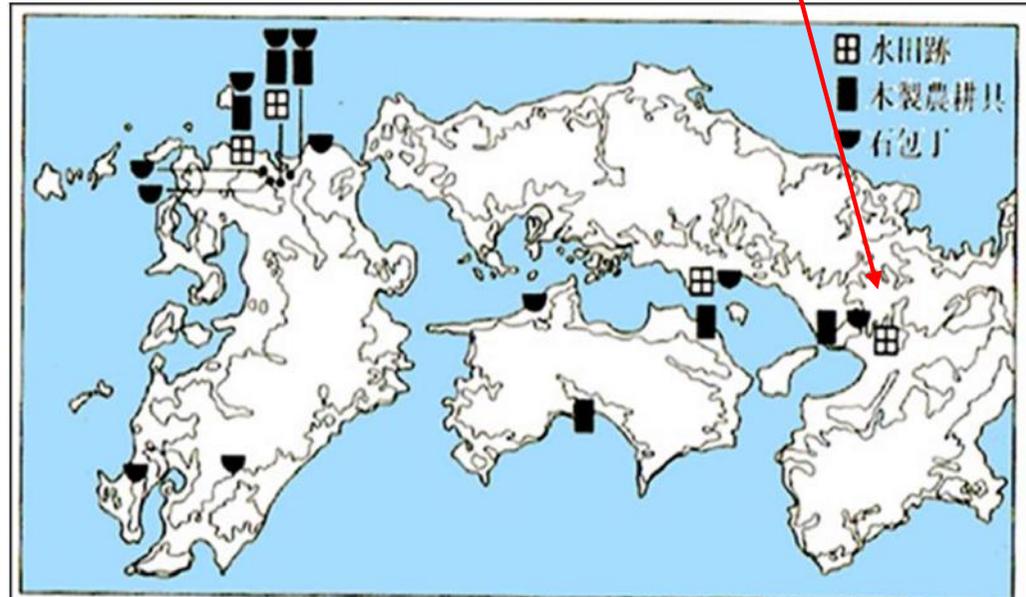
PG液：腐食防止液(プロピレン・グリコール)

牟礼遺跡

↓ 5000年前

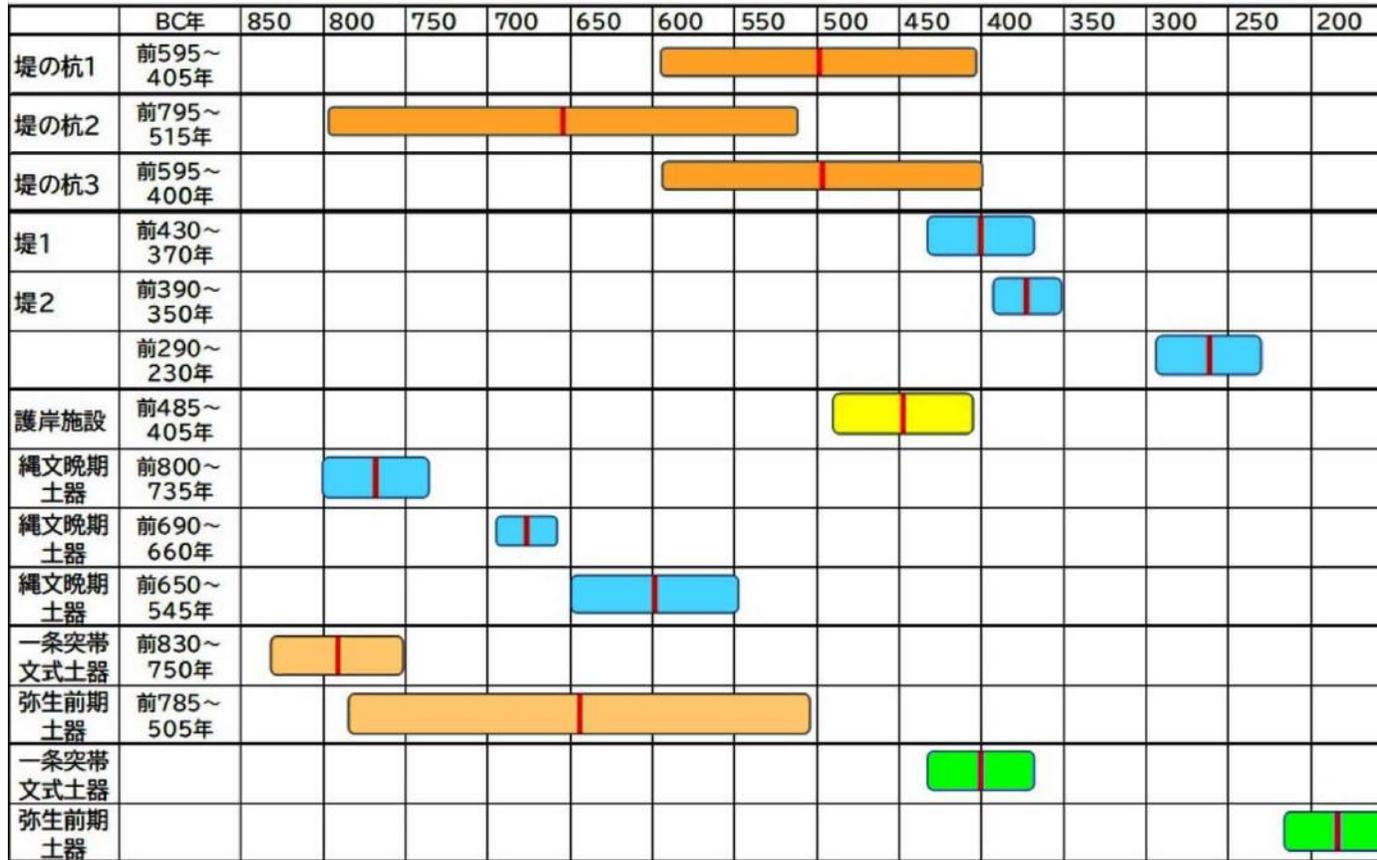
大阪市HPより

↓ 2100年前



縄文晩期後半の水田稲作の証明 日本列島で水稲農耕の痕跡が見え始めるのは西日本の縄文時代晩期後半からである。水田や農具(木製農耕具と磨製石包丁)がその目安となる
寺沢薫「王権誕生」より

問題視され再計測した結果



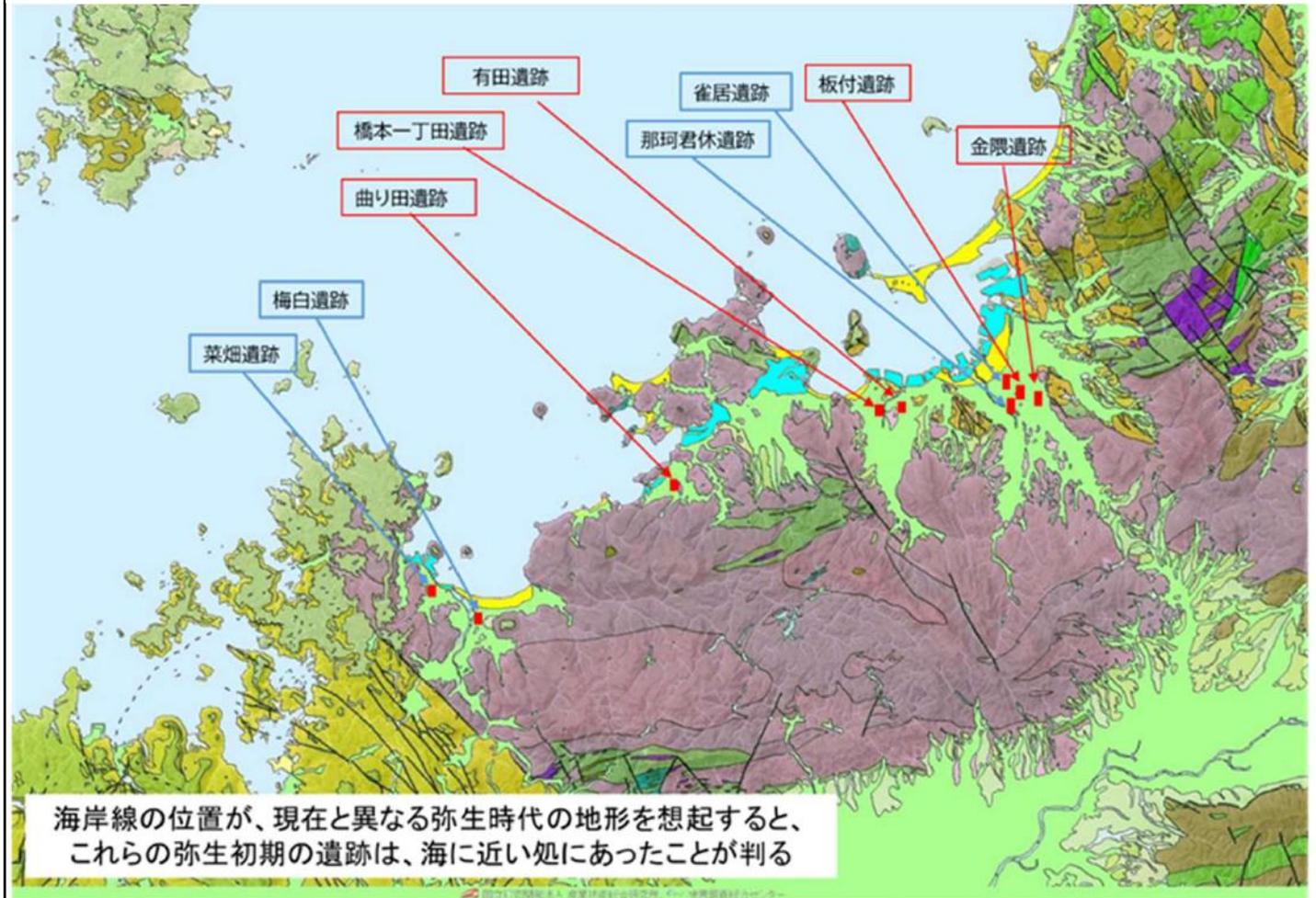
一カ所の遺跡で複数の土器・木杭が計測された事例では、矛盾を指摘され、再計測した結果、ずさんな計測をしていたことが暴露された。初期水田耕作に結び付く突帯文式土器の年代計測の矛盾も露呈した。

歴博の「500年遡る」発表データは、個別のデータが根拠になっている。上記の様に、遺跡ごとに、縄文時代/突帯文式土器/弥生式土器のように順を追った発掘物の年代測定結果を発表した場合には、矛盾が生じる可能性がある。歴博は、各遺跡の前後する時代の測定物を計測した年代データ群を示して、年代の連続性を示した上で、「500年の遡上」を証明すべきと考える。

- 弥生時代は500年遡るに相応しい計測結果を報告したが、別の測定結果との矛盾を指摘された。
- 堤の杭1・2・3には、保存処理の為、PG液が掛けて有り、計測には悪影響のある不純物。
- PG液の処理されていない堤の杭を計測し直して、別の結果を得て、報告を変更。
- 水田耕作用の堤の杭の年代は、「500年遡らない」年代に収まった。
- 突帯文式土器と弥生式土器の計測結果が異常な年代のままにされた。
 - 突帯文土器が、縄文時代よりも、古い年代となるのは、どう考えても異常。
 - 堤の杭の年代以降に該当するはず。
- 前頁の地図のように、海に近い遺跡であり、海洋リザーバ現象が疑われる結果を、計測し直したことで、顕れてしまったもの。

III. 最初の水田稲作を行われた地域の共通点

- 「菜畑遺跡、梅白遺跡、雀居遺跡、那珂君休遺跡」の4遺跡は、ただ偶然、海岸近くの例が取り上げられただけなのか？
- 歴博の500年遡る説を2003年に提起した以来、複数の論文で、計測した試料の出土しとして名前が挙げられた遺跡は、上記の4遺跡の外に、
 - 曲り田遺跡、橋本一丁目田遺跡、有田遺跡、板付遺跡、金隈遺跡などがある。
- それらの遺跡が**どんな地域に存在するのか？**
- 地形図や古地図を参照しながら、弥生初期の時代に、海に近かったのかも検討して行く。



北九州の地質図：

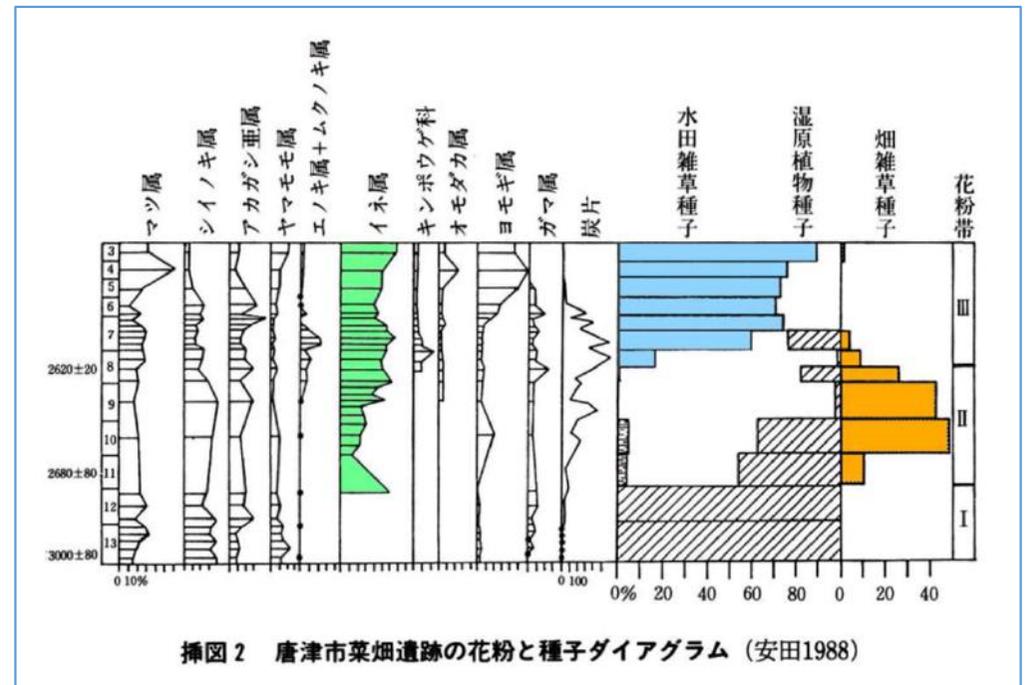
- ■ 水色は新しい堆積物の地層で、弥生時代には海だった処。
- ■ 黄色は古い砂の層で、縄文海進時の後に堆積した地層で、弥生時代には海から陸に変化の途中。

曲り田遺跡を含めて、いずれの遺跡も、極めて海に近い場所に存在する。

- 初期水田稲作の全ての遺跡が、極めて海に近い場所に存在することが判る。
- これは、社会基盤、生業など何らかの基本的な理由が有ったことを示唆する。
- それは何であったのか？ 検討する。

花粉・種子から見る初期稲作

- 唐津・菜畑遺跡の花粉と種子の調査結果
 - 山の寺式土器の段階に突然イネが出る。
 - 稲作を持った人間がやって来た。
 - 種子は畑の雑草が非常に多い。
 - 夜臼式土器の段階になると
 - 畑の雑草が減って
 - 水田の雑草に変わる。
- 菜畑遺跡の場合、最初に導入された稲作は、畑の雑草と大変深い関わり合いを持つ。陸稲の可能性もある。アズキ・メロン・ひょうたんなどの栽培作物も一緒にする。
- ところが、夜臼式土器の段階になると、本格的な水田の稲作農耕に転化している。水田雑草の種子が急増する。花粉も水田雑草に共通。



「古代を考える會」1988・5
報告1. 古代国家成立期の自然環境 安田喜憲

上図は岡山大学の笠原安夫先生が分析。安田が模式的に書いたもの。

- 日本最初の水田稲作の遺跡と云われる菜畑遺跡では、
 - 最初(突帯文式土器の山の寺式土器の時代)は、陸稲で、外の畑作栽培作物も作られていた。
 - 突帯文式土器の夜臼式土器の段階に本格的な水田稲作に入る。
- ✓ 菜畑で陸稲栽培を始め、次いで水田稲作を始めた人々は、どんな人達だったのか？

3) 初期水田稲作を始めた人々の概要

1. 土器は、従来型の縄文式土器とは異なり無紋の突帯文式土器を使用し始めた。
2. 住宅は、縄文時代からの竪穴住居が使われるが、松菊里住居(方形又は円形)の住居が使われる集落もある。又集落の中で一部だけ松菊里型の住居が混じることがある。
3. 墓制は、新しく支石墓が使われた。碁盤式の支石墓の下に、土壙又は木棺に埋葬した。この碁盤式支石墓は、朝鮮半島の南部に多い形式。
4. 支石墓に埋葬された人骨が良く残っていることは少ないが、残っていた事例では、低顔・低身長 of 縄文人の特徴を持つ。
 1. 支石墓に埋葬される人々は、集落のリーダー格の人々との見方も示されており、縄文人が初期の水田稲作の集落をリードしていたと解釈される。
5. 稲の品種について、
 - 縄文時代には熱帯ジャポニカ米が古くから(6000年以上前)栽培されてきたが、
 - 水田稲作では、それと異なる温帯ジャポニカ米の極短小米が主に栽培された。
 - この品種の稲は、その後の時代に波及した品種とは異なる。

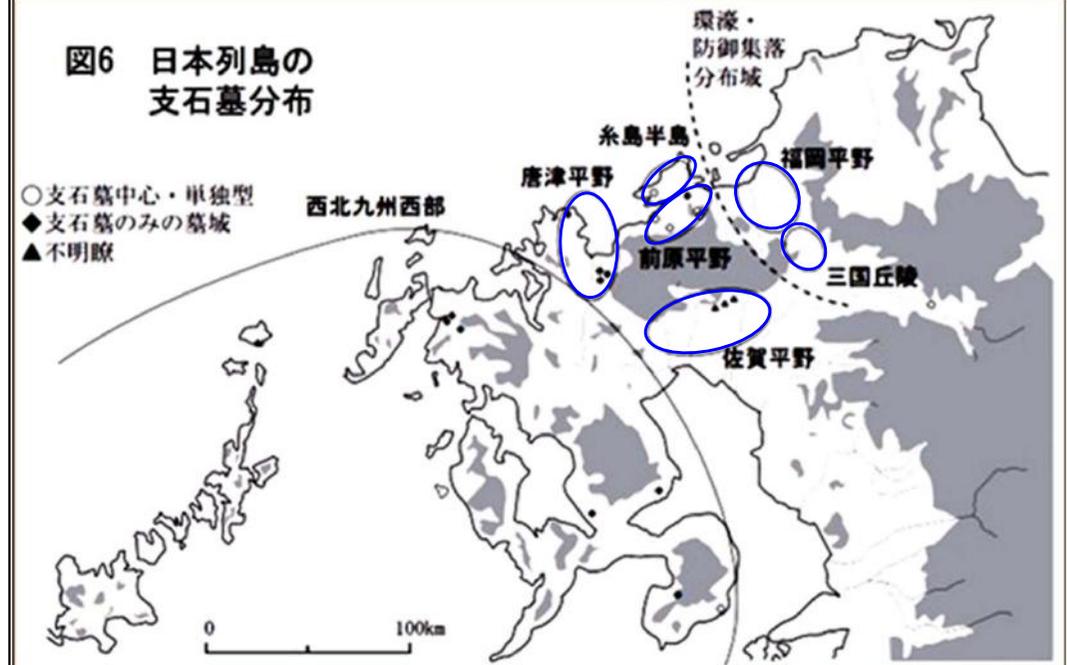
- 突帯文式土器(刻目突帯文土器(きざみめとったいもんどき))：
 - 代表的な突帯文土器は、山ノ寺式土器(やまのでらしきどき)と夜臼式土器(ゆうすしきどき)
- 弥生式土器：板付式土器を含む遠賀川式土器と総称される
- 土師器(古墳時代の土器)：庄内式土器・布留式土器

1) 墓制・支石墓から検討

埼玉大学・中村大介著「支石墓にみる日韓交流」の日本列島の支石墓分布の図を見る。

- 支石墓が分布するのは、「初期水田稲作」が行われていた唐津平野、糸島半島、早良・福岡平野。
- その外に、三国丘陵、佐賀平野があり、西北九州西部の地区があり、より広い領域で支石墓が広まっていたことが判る。
- 著者の中村大介准教授は、この支石墓に葬られた人々について、人骨の形質から縄文人の特徴を有していると記している。
- 更に、海洋資源によった食事をしていたことを挙げている。
- 九州の支石墓は、
 - 中国・朝鮮半島で出土する二種類の方式：テーブル式と碁盤式の内、碁盤式支石墓。
 - 二種類の支石墓は何処に分布するのか？

図6 日本列島の支石墓分布



「支石墓にみる日韓交流」

埼玉大学 准教授 中村大介 著

6. 支石墓に葬られた人々

中国東北地方や韓半島の支石墓に葬られた人々がどのような生業を営んでいたのかを推定することは、人骨の分析が無く、現時点では困難である。

しかし、日本列島では、**糸島地域の新町遺跡**、**唐津平野の大友遺跡**で、人骨が保存されており、後者は特に海洋資源によった食事をしていたことが判明している。(図8 三原・他2003)。

また、両遺跡の人骨はいわゆる「縄文人」の形質的特徴を有する(中橋2003)。支石墓は明らかに渡来してきた要素であるが、日本列島ではそれを築造したのは在地の人々であった。

支石墓について

- 平成26年度 東アジア国際ミニシンポジウム 支石墓の謎・墓地にみる日韓交流
- 埼玉大学 中村大介 「支石墓にみる日韓交流」

－ 2種類と分布

テーブル(卓子)式:北方式、**基盤式**:南方式
 地上式主体 地下式主体



【卓子式】海城析木城（高さ約2.7m）

【基盤式】金海茂溪里（上石の長さ：6.1m）

図1 卓子式支石墓と基盤式支石墓の典型例

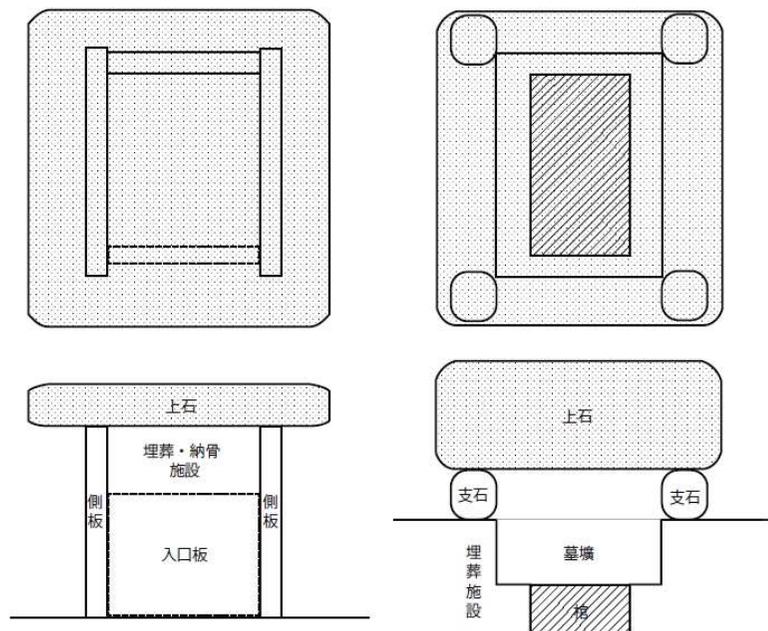


図2 支石墓における各部位の名称

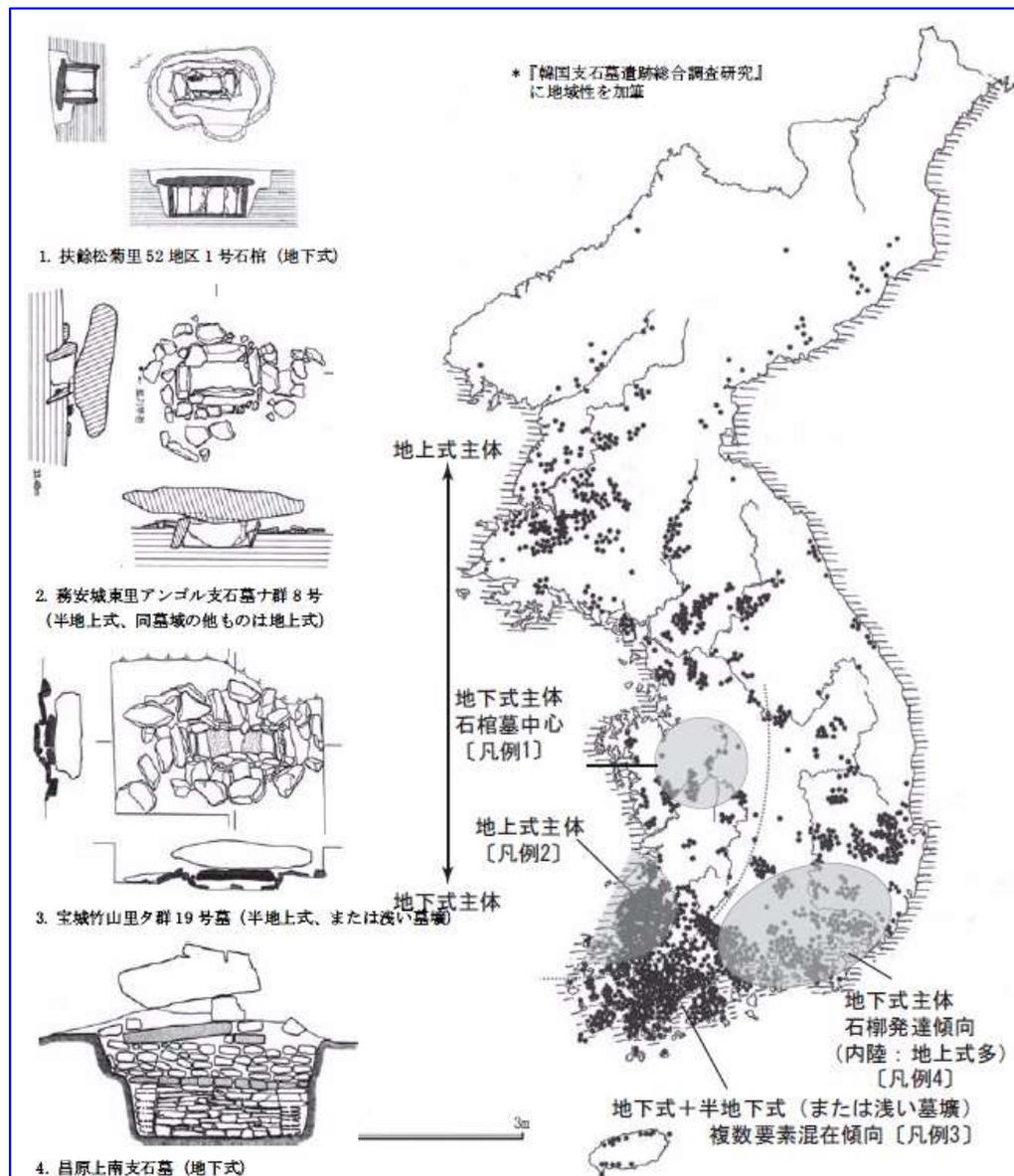


図5 埋葬施設構築位置における朝鮮半島の墓制の地域性

韓半島の支石墓渡来の歴史

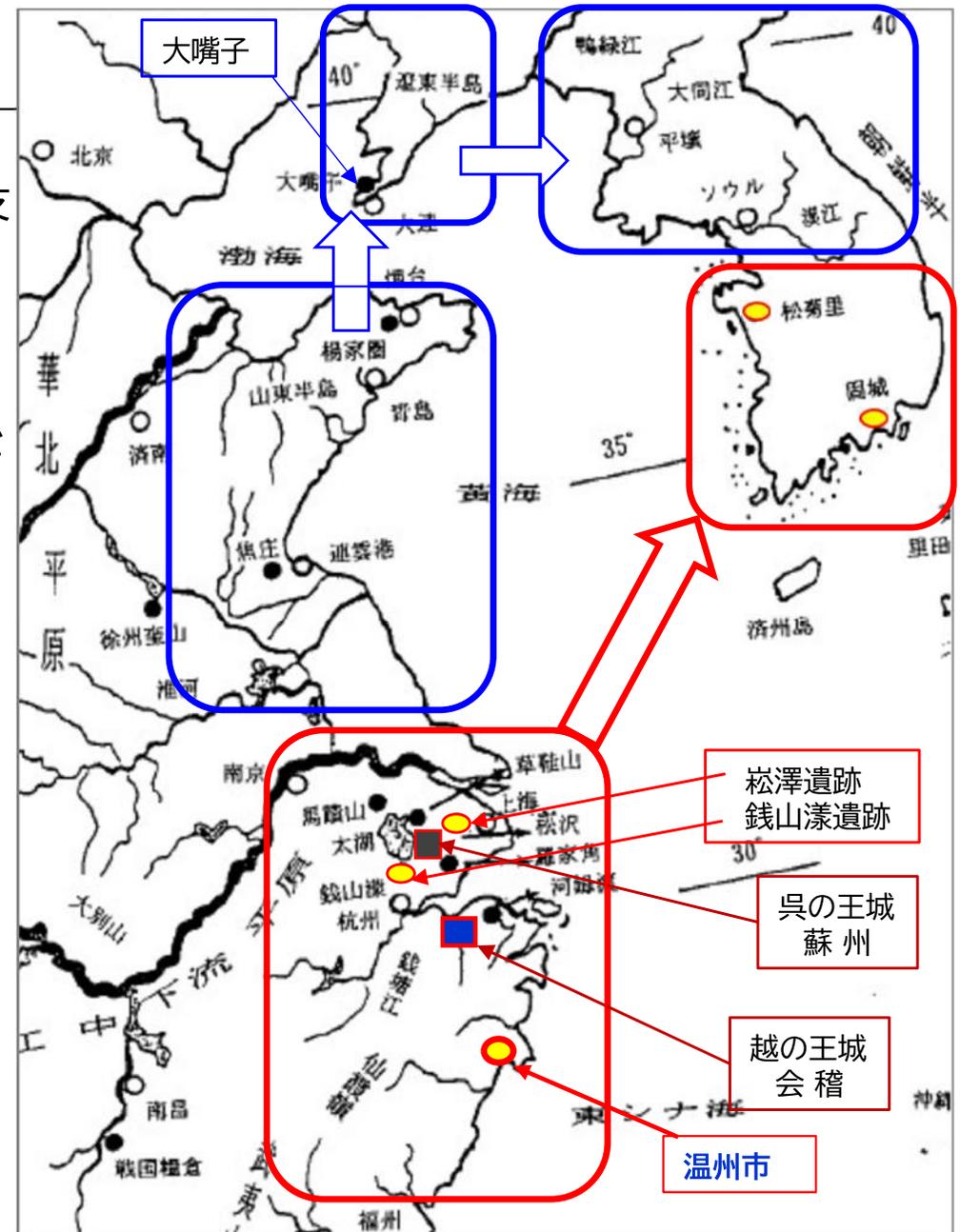
① 二種類の支石墓とその分布

- 山東半島などで発見される石棚墓は、東夷の墓制で、支石が高く、上に乗る石が巨大なことが特長。紀元前1500年頃に遼東半島付近に伝播し、殷(商)の王族の一族である箕子の朝鮮移住に伴い、韓半島北部に広まった。韓国ではテーブル式支石墓と呼ばれている。
- 浙江の南温州市で発掘された石棚墓群の形状は、支石が低い形式のもので、やはり東夷の墓制と言われる。これと同様の墓が、紀元前500年頃、韓半島の南部へ伝播した。韓国では、碁盤式支石墓と云われる。

② 浙江省の銭山漾・崧澤遺跡で出土している米の品種は短粒型の稲種で、これと同じ短粒型の米は、韓半島初期の水田稲作の遺跡である松菊里・固城遺跡から出土する。

③ 臥薪嘗胆(がしんしょうたん)の越王勾践に敗れた呉の多くの人々が、韓半島へ逃れたと記録されている。

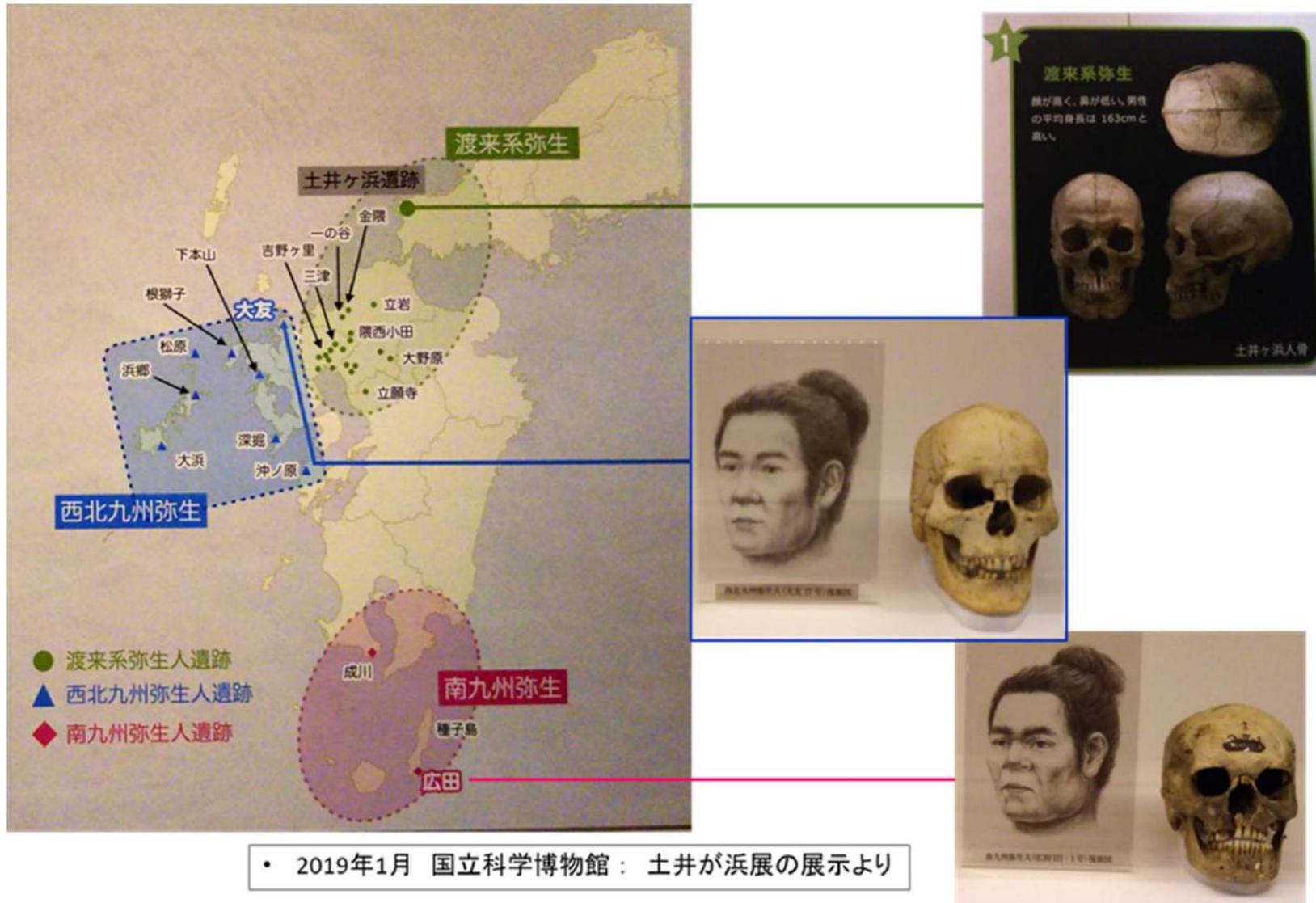
- ①二つのタイプの支石墓の伝播のルートとその時期、
- ②米の品種の特異性、
- ③戦国時代の敗者となった呉などの人民が韓半島は逃れたとする記録・説
- 戦国時代の呉の逃亡者が、地元の短粒米の種子を持ち、船で逃れ、黒潮の西側に沿って北上し、韓半島に上陸し、水田米作を始め、松菊里住居に住み、死ぬと支石墓に収まったものと推察する。



蔡鳳書著 <研究ノート>「山東省の古代文化と日本弥生文化の源流：考古学資料を中心として」では、古代から東夷の居た山東半島で、同様の石棚が発見されていて、遼東半島のものは、山東半島から伝播したと見られる。との説が紹介されている。）

2) 西北弥生人・西北縄文人

- この支石墓の領域は、西北縄文人・西北弥生人と云われる人々の分布図に重なる。



- この図では、海産物を食料としてきた大友遺跡の人骨を代表的に取り上げ、西北九州弥生人としていた。この人々も縄文人の形質を持っているとしていた。この西北弥生人の数世代前の祖先(西北縄文人)が、初期水田稲作を行った人々であったと推定する。

マッチョな西北弥生人 海洋性縄文人

➤ マッチョな西北弥生人（弥生時代まで生きた西北縄文人の子孫）

- 長崎県佐世保市の離島、高島にある弥生時代の宮ノ本遺跡で見つかった人骨が、マッチョだったと、複数のメディアで報道された。
- 発掘に立ち会った人類学者の海部陽介さんがコメントをだし、調査をしている。
- 筑波大学でスポーツ科学を研究する足立和隆准教授に依頼し、CTスキャンなどで、骨の断面図などを調べ、筋肉の付き具合を推定。身長は弥生人平均の162.6cmより4cm低いが体重は77kgあり、上半身が筋肉隆々の屈強な体の持ち主であったことが判ったと記事に記す。
- 高島以外にも、長崎県の平戸や五島、そして熊本県の天草など、九州西北部の複数の島からマッチョな体躯だった人骨が見つまっているとのこと。
- 足立准教授は、彼らが“舟のこぎ手”だったと推測している。貝輪が出土することもあり、“貝の交易”を行っていたのではないかと推測されている。

➤ 海洋性縄文人

- 最初の水田稲作を行っていた集落の長たちは、支石墓分布の広がりを考慮すると、このマッチョな西北縄文人と同族で、海洋性の縄文人であったと推測する。
- 唐津の大友遺跡の縄文人は人骨から海産物を沢山食べていたことが判っている。
- 海に近い、舟を漕ぎ出せる地域に住み、海の交易を行い、海産物を食べ、備蓄の可能な米を栽培する半農半漁の生活を行っていたものと推定する。
- 死ぬと最新の支石墓に葬られた。

3) 稲の品種

米の品種が二種類

- ✓ 菜畑(唐津平野)・有田(早良平野)・板付(福岡平野)・瑞穂(福岡平野-大野城市)の各遺跡で採取した米粒は、
- ✓ 筑後川流域の吉野ヶ里、安永田、須川、津古田や、遠賀川流域の立石、有明海に近い八女などの遺跡で採取した米粒
- 前者の遺跡は、最初に水田稲作を行ったグループに属する遺跡で、ここで作られた米は「**極短小米**」と称され、ややバラつきの大きいものであったとのこと。
- それに比べて、後者の遺跡では、米粒の粒形がやや大きく、「**やや長粒米**」と称される。

この報告は、佐賀大学の和佐野喜久生氏の「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」。
日本国内の遺跡に留まらず、朝鮮半島・中国大陸の主要な遺跡で発掘された米を査した。

東アジアの稲作起源と古代稲作文化

Genetical and Archaeological Investigation on the Origin of Cultivated Rice and Ancient Rice Culture in East Asia

文部省科学研究費助成による国際学術研究

報告・論文集

平成17年(2005年)7月



和佐野喜久生 編著

和佐野喜久生 (佐賀大学)

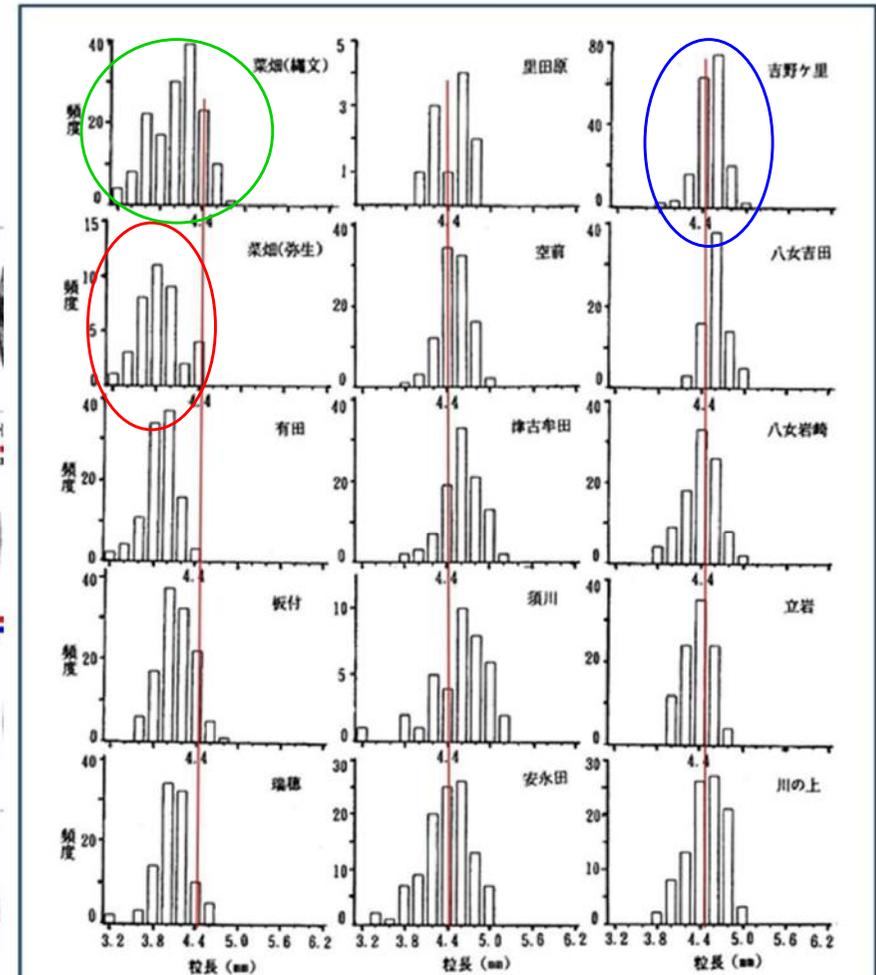
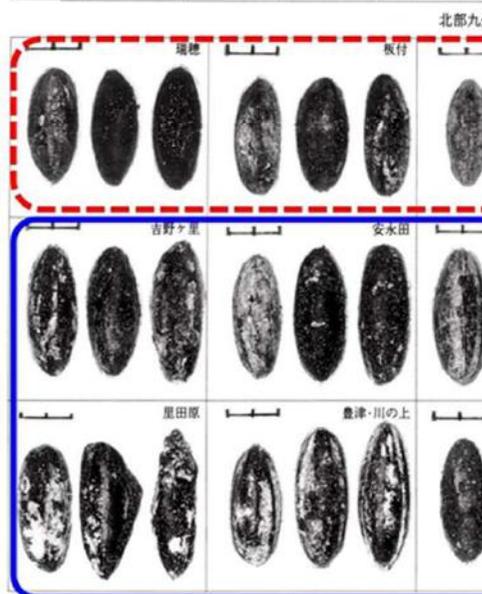


図7 北部九州古代遺跡の米粒長の頻度分布図

二種類の稲

- 二つの論文から判断できること。
 - 「東アジアの稲作起源と古代稲作文化報告論文集」研究代表の佐賀大学の和佐野喜久雄教授
 - 弘前大学の上條信彦准教授著の「弥生時代開始期における出土米の形質変異」
- 玄界灘沿岸・早良・福岡平野に入った早期(夜臼式期:突帯文式土器の時期)の米
 - この品種は消滅し、
 - 次の時代(板付I式期:弥生式土器の初期)には、別の米の品種に置き換わった。
- 次の世代の品種
 - 栽培地域は九州の中でも広がり、筑後川流域の吉野ヶ里遺跡等や、遠賀川流域の立石遺跡、有明海に近い八女遺跡等に拡散した。
- 初期の水田稲作で栽培された品種とは、別の品種の米が、時期を隔てて九州に(日本に)持ち込まれ、弥生時代にはこれが主たる栽培種となった。

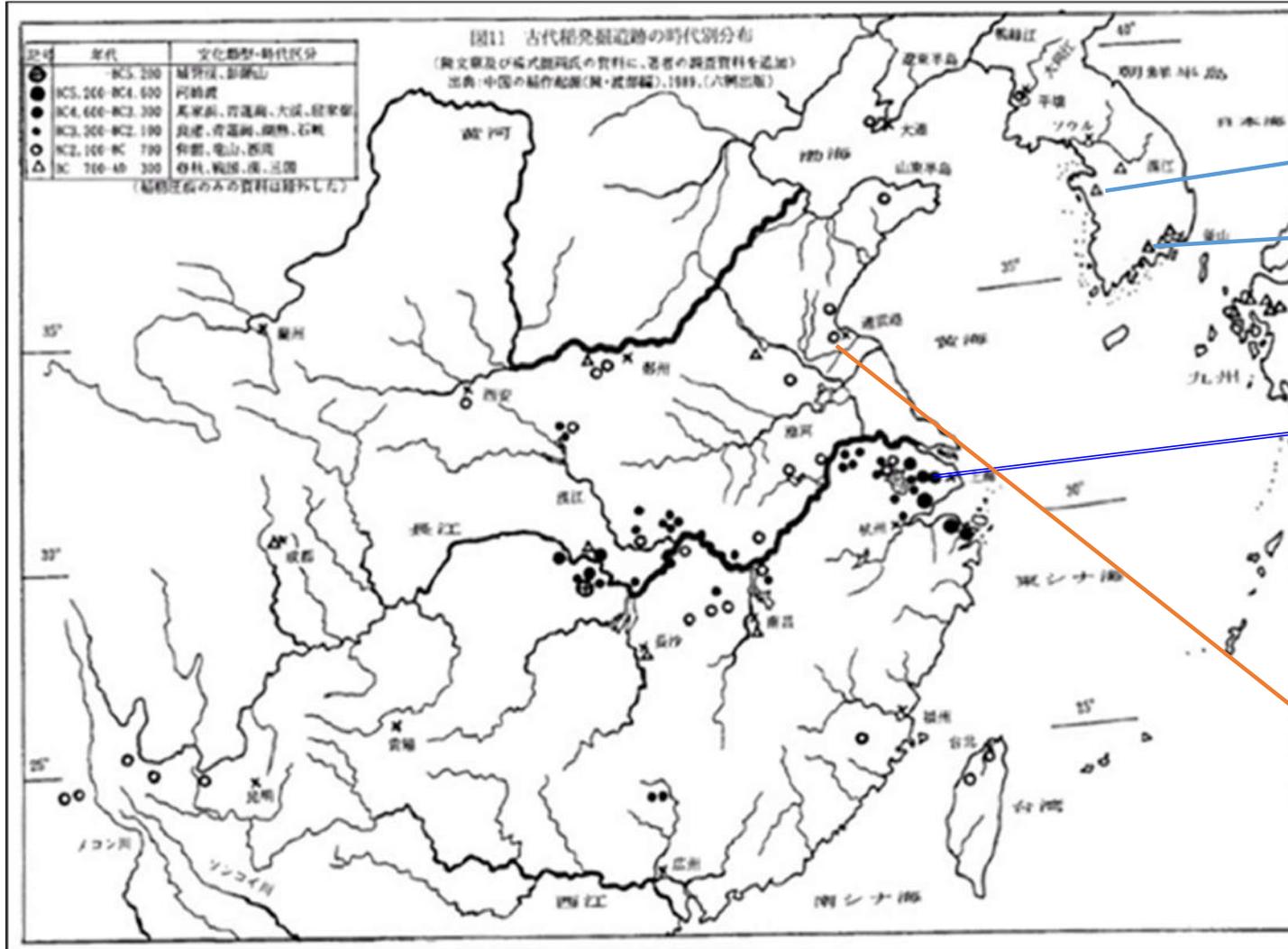
「弥生時代開始期における出土米の形質変異」

おわりに：形質変異の背景

このように、出土イネ種子の粒形質を検討した結果、非破壊分析である計測値レベルにおいて時空間的なまとまりや変異の規則性がうかがえる。

まず、早期(夜臼式期)のイネは、前期の形質とは明らかに異なる。一方菜畑遺跡や宇木汲田貝塚では形質的に類似することから、多様性に幅があるイネが当初より導入されたとみられる。次の前期前葉(板付I式期)のイネは、ばらつきが小さくなるとともに、より丸くかつ大きい粒へ収斂されていく。粒形質の変異については、九州内部で選抜が進んだ場合だけでなく、大陸から選抜が進んだものを導入した場合についても検討する必要がある。出土イネが多量検出される福岡平野の遺跡では、大陸からの影響により大規模水田が営まれ、農耕技術も受容したとされる。したがって、板付I式期においてもイネ形質変化の第二波と呼べるような選抜が進んだ一定の形質をもつイネが大規模水稻農耕に伴う技術の1つとして大陸から導入されたと考えるほうが理解しやすい。

4) 二種類の稲の源郷は？



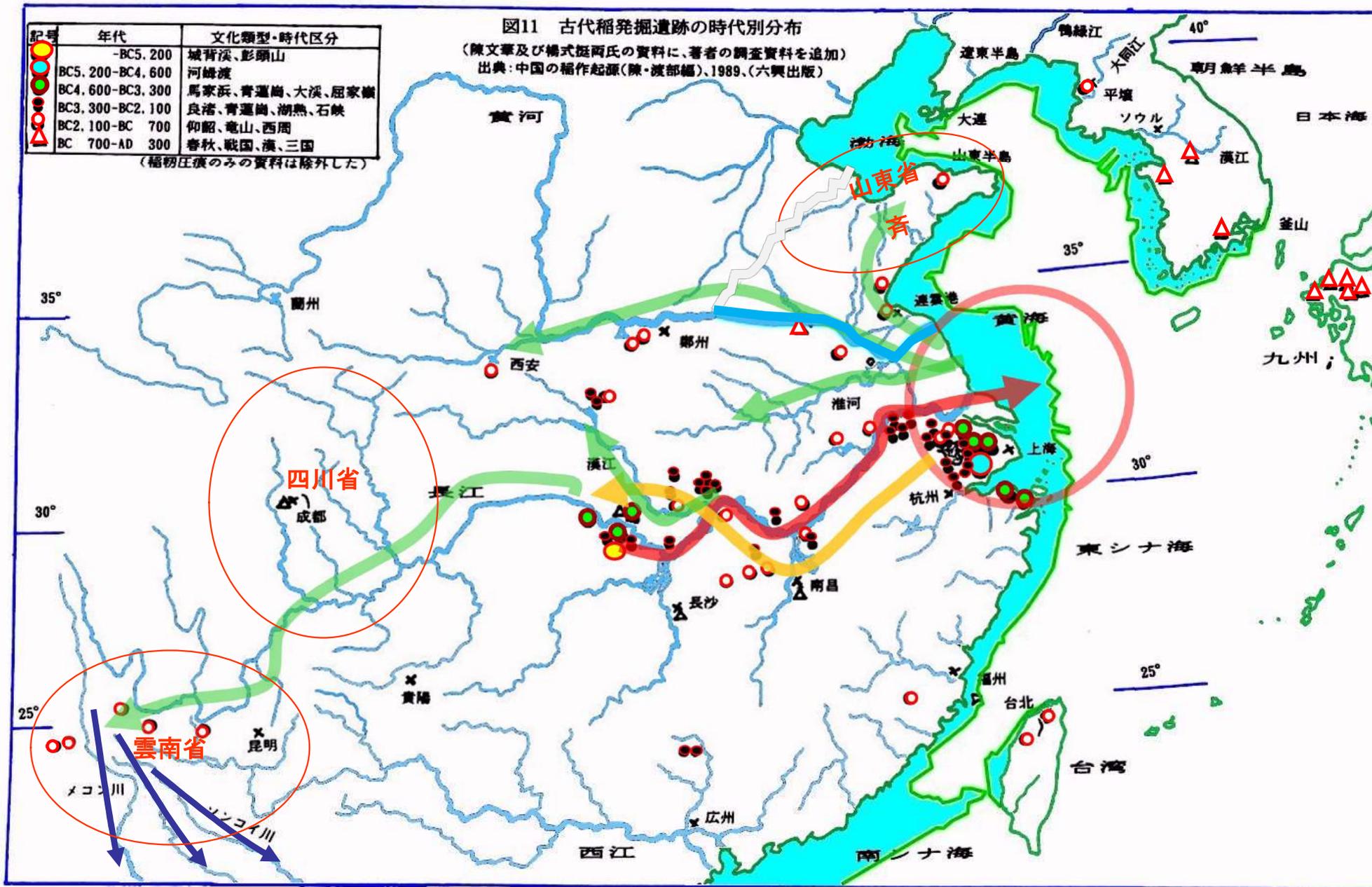
1. 菜畑・有田・板付遺跡の「極短小米」と同じ品種は、

- 朝鮮半島の松菊里遺跡(BC500)と固城遺跡(AD100)から出土。
- 中国長江の河口域の崧澤遺跡(BC4000) 銭山漾遺跡(BC2800)から出土

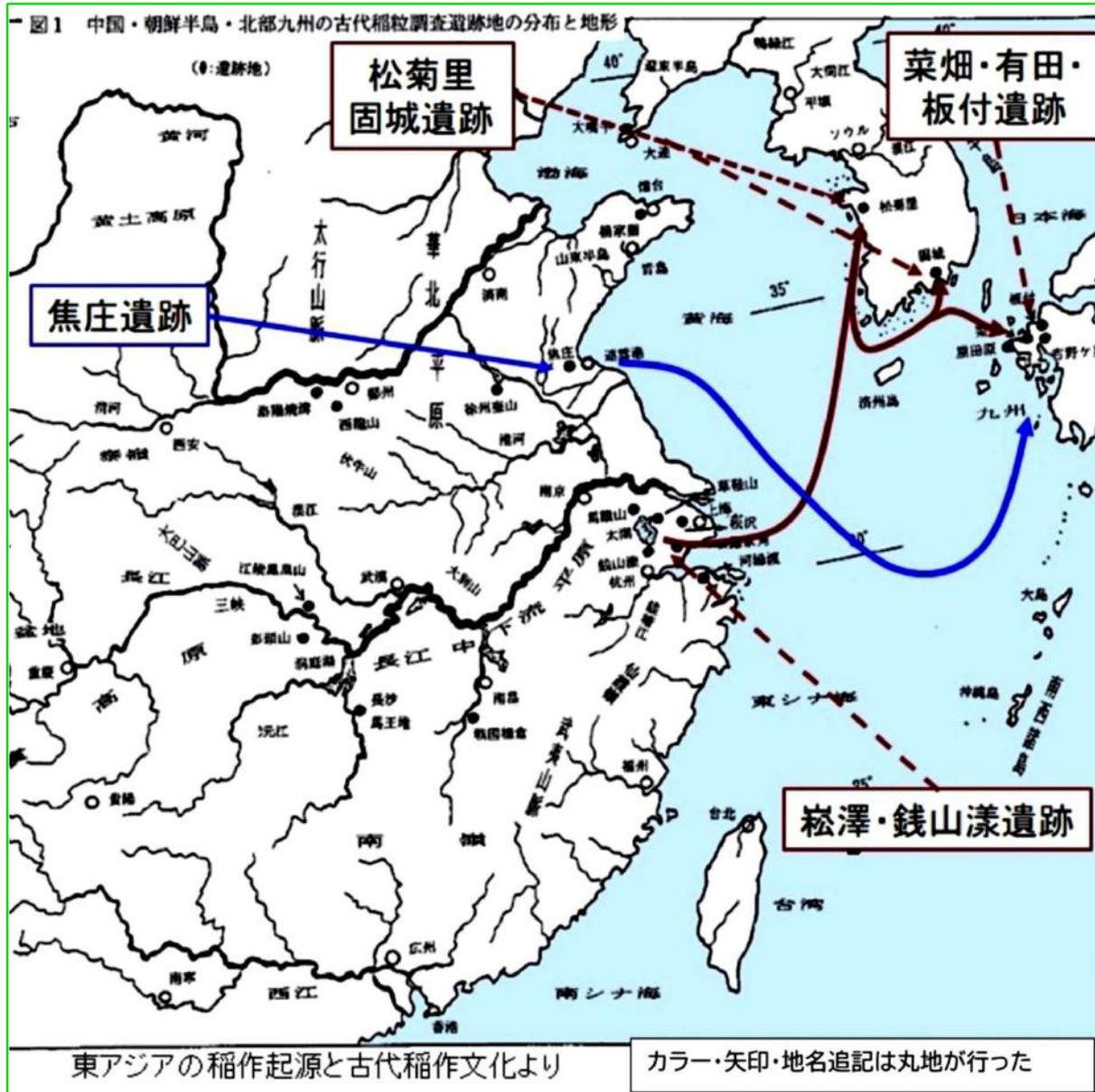
2. 筑後川流域の吉野ヶ里などで出土する「やや長粒」の品種は、

- 中国・山東半島付近の焦庄遺跡(西周: BC770年以前)から出土した。

古代稻発掘遺跡と “稲作の伝播”



渡来ルート



日本の最初の水田稲作で使われた「極短小米」の源郷は、中国の長江河口域の崧澤・銭山漾の地域で

BC500年頃に朝鮮半島の松菊里遺跡に海路移動し、松菊里遺跡から日本へ移動したと見る。

移動が、陸路ならば、山東半島・遼東半島・朝鮮北部から朝鮮中部までのルートを通るはずであるが、そのルート上では「極短小米」は発見されず、別のタイプの米が発見されるため、

和佐野喜久生氏は、海路で直接、長江の下流域から、朝鮮半島中部に入ったと推測している。

朝鮮半島南部に多い碁盤式支石墓も北九州へ伝播しているが、この碁盤式支石墓は長江河口域の南の温州市から出土しており、東夷の墓制と云われる。

温州は、呉の伍子胥の出身地で、崧澤・銭山漾遺跡は、春秋時代の呉の本拠地に近い。

春秋・呉が滅んだ後に、呉の難民が韓半島に多く渡来したとの記述ある。支石墓と「極短小米」の水田稲作が同時に、朝鮮半島へ移った可能性が高い。

筑後川流域の吉野ヶ里などで出土する「やや長粒」の品種は、山東半島の付近の焦庄遺跡が源郷とすると、弥生時代前期前葉に渡来した弥生人の源郷も同じ地域と推測される。

因みに、ここに近い臨淄市から出土した多数の人骨は、土井ヶ浜遺跡から出土した弥生人の人骨に極めて近いことが調査報告されている。

(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏が、中国各地で調査し、共同報告書を出している。)

V.二度の渡来

1)異なる品種の米と異なる時期の渡来

突帯文土器～遠賀川式(系)土器の遺跡一覧表

地図 番号	遺跡名	板付遺跡G- 7a・b調査区下 層	板付遺跡G- 7a・b調査区中 層	板付遺跡G- 7a・b調査区上 層	雀居遺跡5次 SK188他	比恵遺跡30次 SU007他	比恵遺跡30次 SU012他	備考
1	菜畑遺跡	●	●	●+○	○	○		水田跡、大陸系磨製石器
2	石崎曲り田遺跡	●						集落、大陸系磨製石器
3	有田七田前遺跡	●	●					大陸系磨製石器 環濠集落、松菊 里型住居、大陸 系磨製石器
4	有田遺跡		●	●+○	○+◎	○	○+亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
5	橋本一丁田遺跡	●	●	●+○	○+◎			大陸系磨製石器
6	石丸古川遺跡		●	●+○				大陸系磨製石器
7	重留遺跡				○+◎	○	○+亀の甲タイプ	松菊里型住居 環濠集落、松菊 里型住居、大陸 系磨製石器
8	板付遺跡	●	●	●+○	○+◎極少	○	○+亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
9	雀居遺跡	●	●	●+○	○+◎極少	○	○+亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
10	那珂遺跡		●	●+○	○+◎極少	○	○+亀の甲タイプ	環濠集落、大陸 系磨製石器
11	比恵遺跡		●	●+○	○+◎極少	○	○+亀の甲タイプ	松菊里型住居、 大陸系磨製石器
12	雑餉原遺跡				○	○	○+亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
13	江辻遺跡	●	●	●+○				松菊里型住居、 大陸系磨製石器 環濠集落、松菊 里型住居、大陸 系磨製石器
14	今川遺跡			●+○	○	○		大陸系磨製石器
15	前田遺跡				○	○		方形プラン整穴 住居跡、大陸系 磨製石器
16	大木遺跡			●				松菊里型住居、 大陸系磨製石器
既往の編年・型式・様式		夜臼Ⅰ式	夜臼Ⅱa式	夜臼Ⅱb式+ 板付Ⅰ式	板付Ⅱa式(古)	板付Ⅱa式(新)	板付Ⅱb式	

●は晩期(早期)の突帯文土器 ○は遠賀川式(系)土器 ◎は弥生土器化した突帯文系土器

福岡市教育委員会菅波正人氏の「北部九州における弥生文化の成立」の中の弥生初期の土器変遷図が有る。

北九州の16の遺跡について、時期毎に、突帯文式土器(夜臼Ⅰ,Ⅱ式)と弥生式土器(遠賀川式:板付Ⅰ,Ⅱ式)及び、その中間型の弥生土器化した突帯文式土器を一覧表にしている。

この一覧表は、読み方が分ると示唆するところが明瞭に読み取れる。

遺跡名の並び順は、唐津平野から東に向かい、糸島、早良平野、福岡平野、から東の宗像まで並び、最後の二つの遺跡は、筑後平野(前田遺跡は有明海に近い大川市、大木遺跡は朝倉市筑前町=旧夜臼町)

時代順 : 左が古く、右が新しい。上にある項目名は、発掘する地層の名称で左側が下の層で古い。地層から示される時代順は高い正確性を持つ。

●○◎は、土器形式

● は突帯文式土器(夜臼式Ⅰ,Ⅱ式)

○ は弥生式土器(遠賀川式土器:板付Ⅰ,Ⅱ式)

◎ 作り手と技法は縄文土器の製作者で、弥生式土器に似せて作られた。

注目すべきことは、ある時期に、一斉に、突帯文式土器と弥生式土器の両方が出土すること。その後は、一斉に弥生式土器に替わる。一斉変化の次の時期には、一部の地域では、縄文土器の製作者が、弥生式土器に似せて作った土器が出土することがある。

土器の変化から読むと、ある時から縄文の村が弥生の村に置き換わったことになる。この現象をどう見るかが、興味深い処。土器の外に、このような例が有るのか検討する。

2) 戦争遺跡 初期の戦争遺跡 支石墓に埋葬vs甕棺埋葬



甕棺内の戦傷遺跡(橋口達也「弥生時代の戦い」中K I・II:早期)



戦傷遺跡と集落

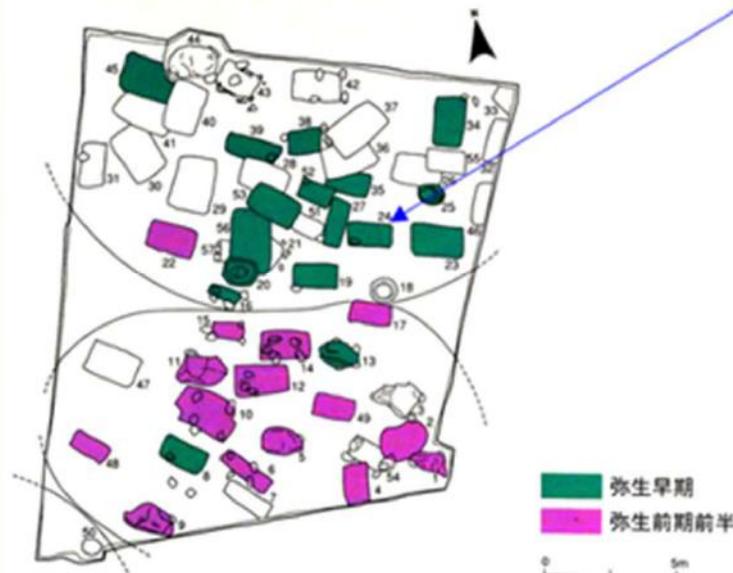
- 縄文時代には戦争の痕跡は無く、弥生時代に入ると戦傷遺跡が出現する。
 - 北九州とその外限定された地域にのみ発生したことが、調査されている。
- 初期の水田稲作遺跡の中には、戦傷人骨を含む戦争遺跡も含まれている。
 - 新町遺跡・長野宮ノ前遺跡には、支石墓の下に、2名ずつの戦傷人骨が含まれる。
- 次いで、弥生時代の初期形式の甕棺に埋葬された戦傷人骨を含む戦争遺跡を配置してみる。
 - 甕棺の戦傷遺跡が近くに無いのは、菜畑遺跡と新町遺跡・長野宮ノ前遺跡。
 - 但し、長野宮ノ前遺跡は、現状の遺跡の場所は、移動して設置されたもの。
 - 殆どの初期水田遺跡そのものに、又はその近くの遺跡に甕棺埋葬の戦傷遺跡が存在する。
- これをどう評価するのか？ 考えてみたい。
- 戦傷遺骨が甕棺に埋葬されたことは、
 - 戦いで傷を負い、死んだ兵は、
 - 仲間の手で手厚く葬られた
 - 甕棺埋葬方式を持つ弥生人が戦いに勝った側と見る。
 - その戦いで負けた側は、初期水田稲作を行っていた集落となる。

甕棺の戦傷遺跡が近くに無い新町遺跡を訪れ確認してみた。

糸島市新町遺跡



■ 墓域復原図 ■



■ 24号墓の人骨 ■



ここ24号墓からは成人男子の骨が出土しています。この骨の左足の太ももには磨製石鏃が刺さったままになっていて、この男の人が戦闘で死んだことが分かります。

また、この骨の下には人頭大の穴があり、そこから少年男子の歯だけが出土しています。

このような異常な人骨の出土状況は何を物語っているのでしょうか。

おそらく、当時の部族間の戦争があって、この24号墓の主が戦死したことの報復に、相手部族のまだ幼い少年の首を切って、この墓と一緒に納めたのではないのでしょうか。当時は首狩りの風習が日本にもあったのかもしれませんが。

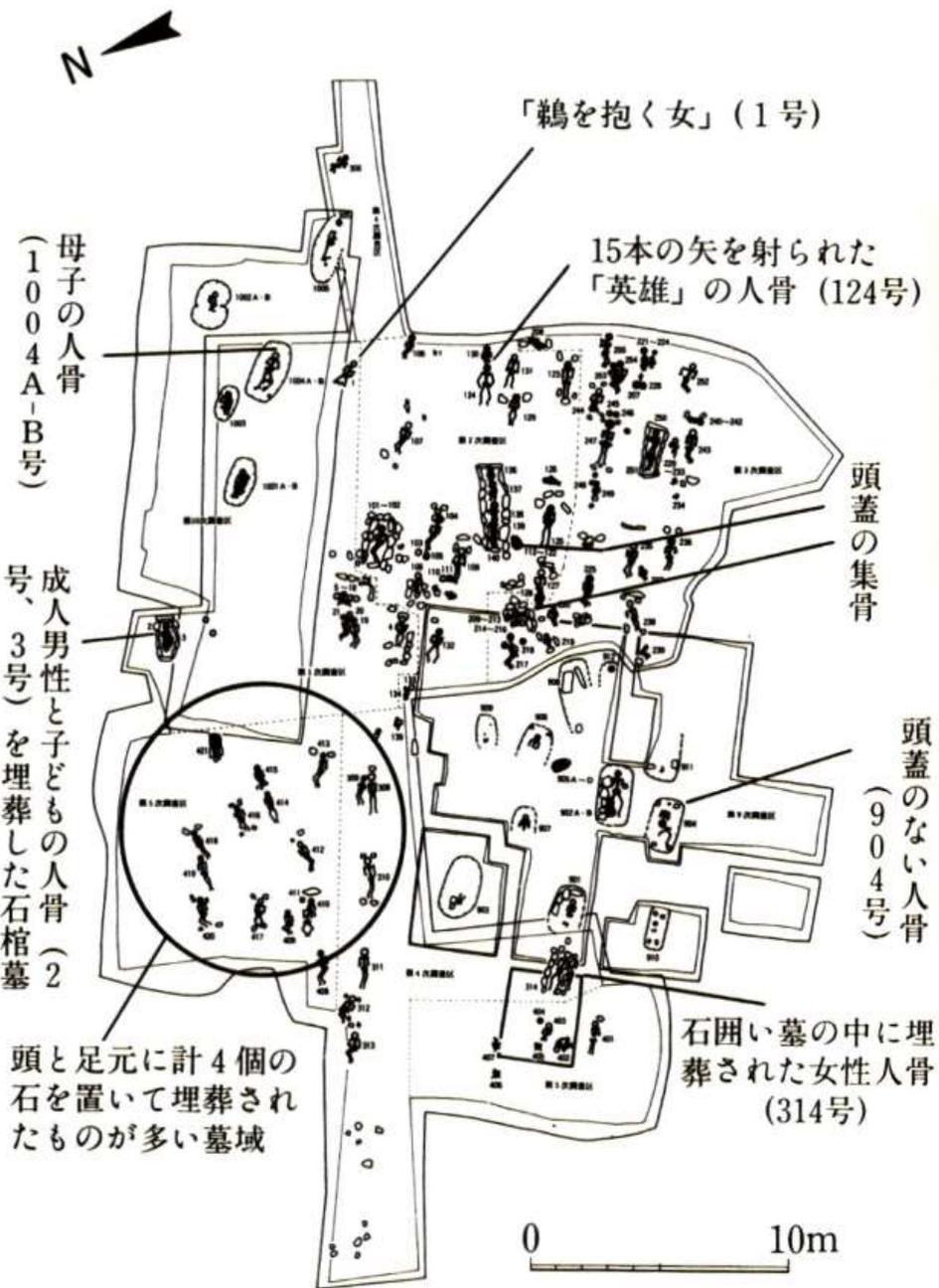
新町遺跡

- 新町遺跡で起きたこと
 - 初めの戦いでは、縄文人側が勝組
 - その後、弥生人が縄文人の集落を襲い、勝利
 - 集落は引き続き使われ、弥生人の集落となった
- 「弥生初期の土器変遷図」で見られた
 - 「ある時期に一斉に」変わったことは、**ここでは、戦争を伴ったことが判る。**
 - 外の初期水田稲作の行われていた集落も全て、
甕棺に納められた戦傷人骨のある弥生集落に囲まれていた
ことが、先ほどの地図で分かった
 - これも「ある時期に一斉」に発生した縄文人と弥生人の戦争によるものと推定する。

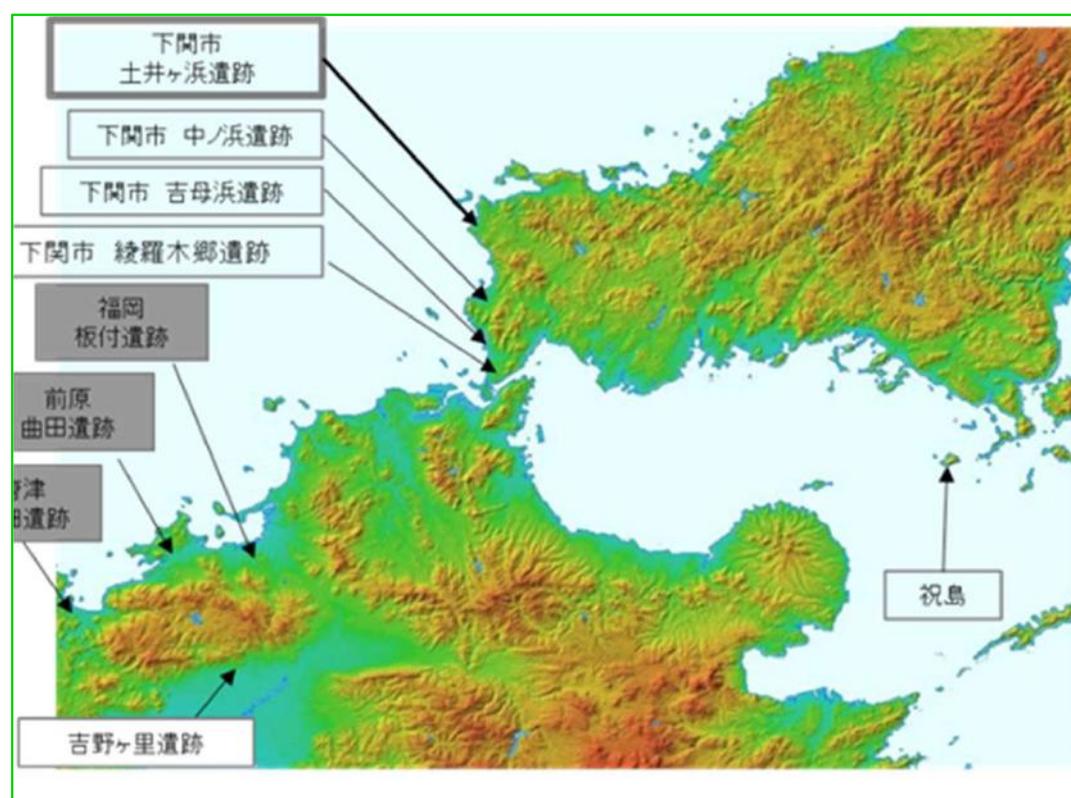
3) 最も早い弥生の戦争遺跡

- 最初は、縄文人側が勝利者だったとすると、大変気になる遺跡がある。
 - 大量の弥生渡来人が、渡来して間もなくの時期に襲われ、大量に虐殺され、故郷をのぞむかの如く、切られた頭蓋骨が浜辺に並べられた遺跡がある。
 - 土井ヶ浜遺跡で、32個の頭蓋骨だけ集められて埋葬、首のない遺体、15本の鏃が刺さったと推定される遺体などが埋葬される。
 - 到来後まもなくの弥生渡来人であるとのこと。
 - この遺跡では、貝殻・貝粉が大量に含まれる浜辺に並べられたと云う稀な好条件によって、現代まで遺骨が残された遺跡。弥生人達の頭蓋骨が、一斉に西を向いて埋葬されている。
- 2019年1月20日、科学博物館で開催された土井ヶ浜展の折に、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 学芸員の高椋 浩史氏が講演した。
 - 取り上げたのは、頭蓋骨だけ埋葬された例についてで、詳細な説明がありました。
 - 風葬・土葬などの後に、骨を拾い上げ「再埋葬」する場合は、喉仏や頸骨は、頭蓋骨とは別に取り扱われ、別になる。
 - 喉仏や頸骨が、頭蓋骨側の残る場合は、体から首が切り離された場合に起きる。
 - 土井ヶ浜の頭蓋骨には、喉仏の骨と一緒にしている場合があるとして写真を示した。
 - 従って、土井ヶ浜遺跡は戦争遺跡だったことになる。
- この多数の首を切られた遺骨が、浜に並べられた状況をどのように推測するか？
 - ネット上で様々な推測がされていた。
 - 争いに備えをもってきたはずの渡来人が、渡来直後に集団虐殺された理由や、殺戮した相手は誰かなど、疑問が示されていた。

土井ヶ浜遺跡 人骨発掘の分布図



(第10次発掘調査概報より)



そのネット上の議論

「武器を持った弥生渡来人が先住民の縄文人達を襲い、殺したことは想像が付く。」

「土井ヶ浜の場合は、その逆のケース。」

「戦争経験を持ち、武器を持った縄文人集団が襲ったとしか思えないが、そんなことは有り得ない。」とした意見があった。

その意見は、極めて印象的だった。

土井ガ浜を襲ったグループ

- 新町遺跡・長野宮ノ前遺跡などの縄文人グループが、
 - 山口県下関市土井ヶ浜の遺跡の弥生人主集落を襲ったとすると、
 - 縄文人グループが、海洋民であるならば、海流に乗り、襲撃できる距離と位置関係にある。
 - 玄界灘に面して集落を構えていた海洋性縄文人族にとっては、行動範囲であった可能性は有る。
- 初期水田稲作を行っていた縄文人は、そんな戦争能力を持っていたのだろうか？
 - 初期水田遺跡では、青銅製剣・磨製石剣・磨製石鏃が出土する。
 - 従来の縄文人の武器と違い
 - 金属製の武器を持ち、
 - その磨製石鏃は大型化し、
 - 縄文時代の石鏃に比べ殺傷力の大きなものになっている。



- 初期水田稲作を行った海洋性縄文人は、渡来直後の弥生人の小集落を襲うだけの武力は持っていたと云える。

早良平野の時代毎の遺跡分布図を見る

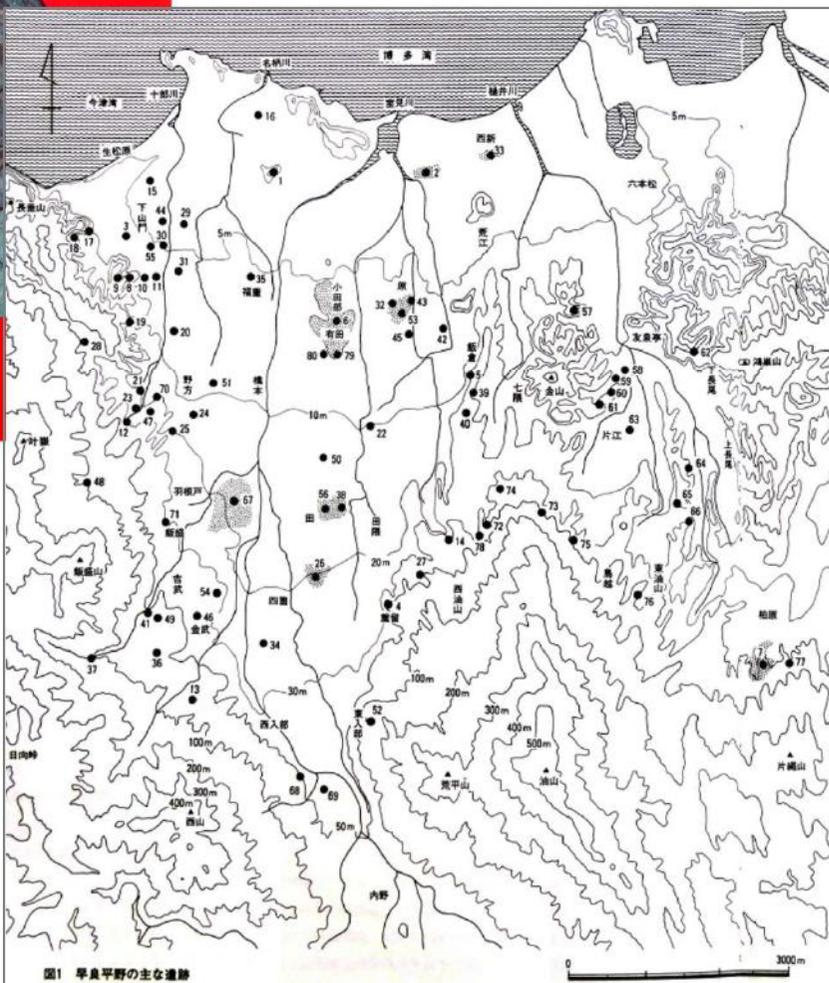
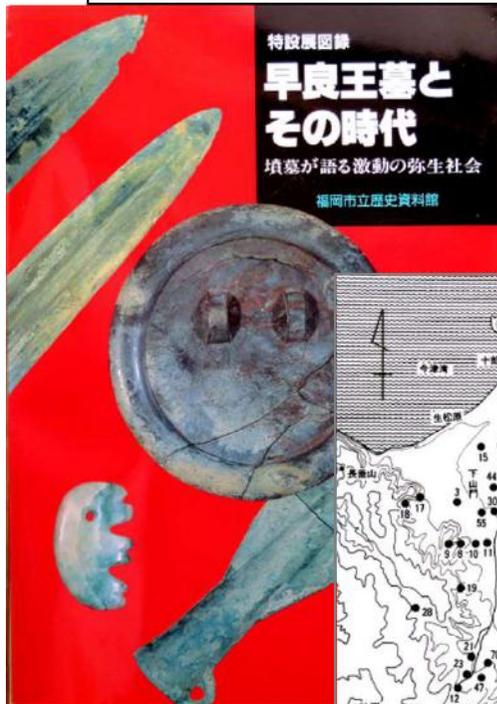


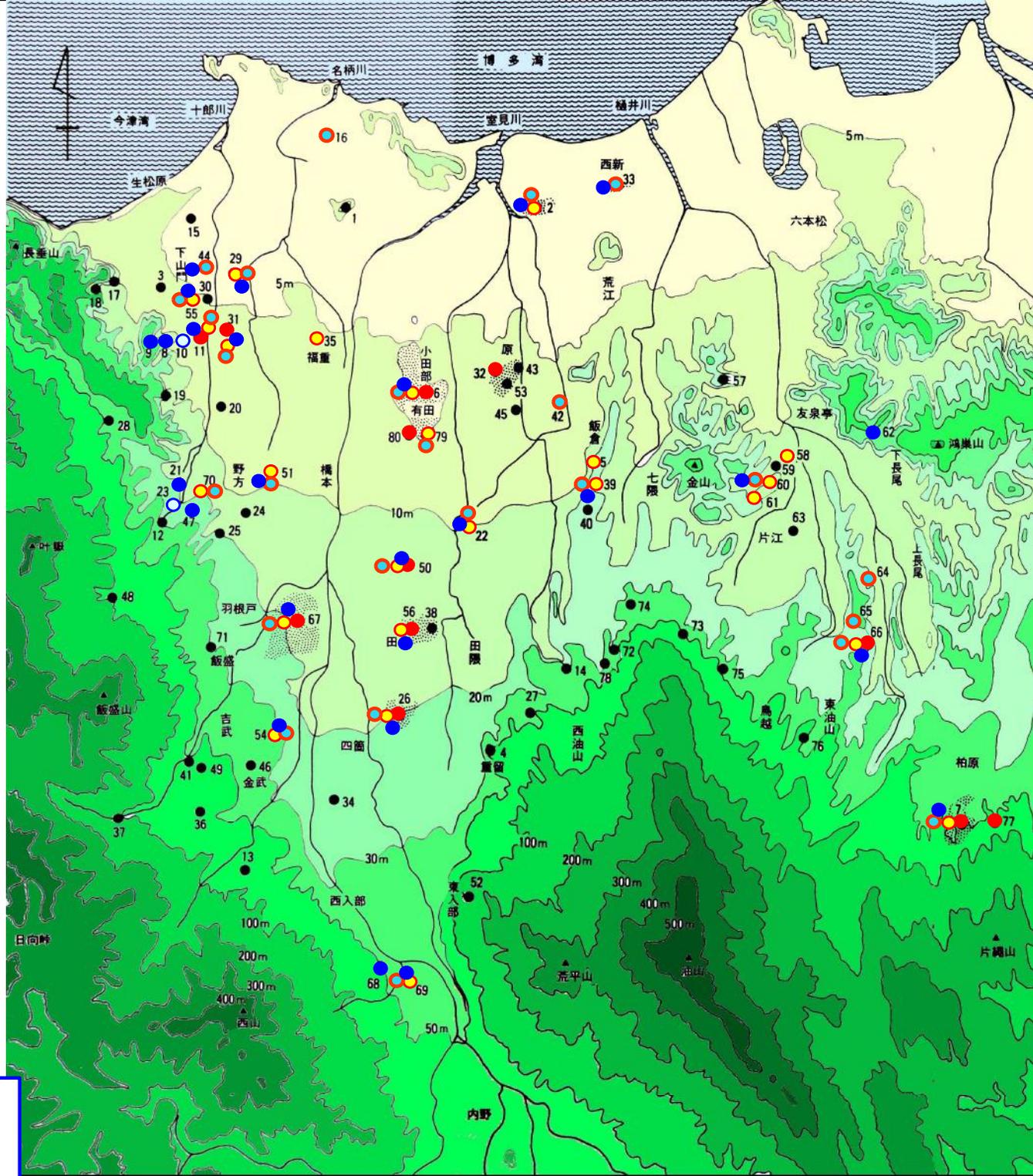
図1 早良平野の主な遺跡

No.	遺跡名	遺構	時代	縄文	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳	No.
1	五重城	遺跡	弥生前期		○				1
2	山遺原	遺跡	弥生前期~古墳	○	○				2
3	島崎ノ倉	遺跡	奈良						3
4	倉田原	遺跡	古墳前期						4
5	倉田原	遺跡	古墳前期						5
6	倉田原	遺跡	縄文~中世	○	○	○	○		6
7	倉田原	遺跡	先土器~中世	○	○	○	○		7
8	倉田原	遺跡	弥生後期						8
9	倉田原	遺跡	古墳後期						9
10	倉田原	遺跡	弥生終末~古墳	○	○	○	○		10
11	倉田原	遺跡	縄文・弥生・古墳	○	○	○	○		11
12	倉田原	遺跡	古墳後期						12
13	倉田原	遺跡	古墳後期						13
14	倉田原	遺跡	古墳後期						14
15	倉田原	遺跡	古墳~平安						15
16	倉田原	遺跡	弥生中期						16
17	倉田原	遺跡	平安						17
18	倉田原	遺跡	古墳後期						18
19	倉田原	遺跡	古墳後期						19
20	倉田原	遺跡	古墳~奈良						20
21	倉田原	遺跡	弥生後期~古墳	○	○	○	○		21
22	倉田原	遺跡	弥生前期~古墳	○	○	○	○		22
23	倉田原	遺跡	弥生終末~古墳	○	○	○	○		23
24	倉田原	遺跡	古墳						24
25	倉田原	遺跡	古墳~中世	○	○	○	○		25
26	倉田原	遺跡	縄文・弥生・古墳	○	○	○	○		26
27	倉田原	遺跡	古墳後期						27
28	倉田原	遺跡	古墳後期						28
29	倉田原	遺跡	弥生・平安	○	○	○	○		29
30	倉田原	遺跡	古墳前期	○	○	○	○		30
31	倉田原	遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良	○	○	○	○		31
32	倉田原	遺跡	縄文晩期・古墳・中世	○	○	○	○		32
33	倉田原	遺跡	弥生中期~古墳	○	○	○	○		33
34	倉田原	遺跡	古墳						34
35	倉田原	遺跡	弥生前期						35
36	倉田原	遺跡	古墳後期						36
37	倉田原	遺跡	古墳後期						37
38	倉田原	遺跡	平安~鎌倉	○	○	○	○		38
39	倉田原	遺跡	弥生・室町	○	○	○	○		39
40	倉田原	遺跡	古墳後期						40
41	倉田原	遺跡	古墳後期						41
42	倉田原	遺跡	弥生中期						42
43	倉田原	遺跡	平安						43
44	倉田原	遺跡	弥生中期~後期	○	○	○	○		44
45	倉田原	遺跡	古墳前期						45
46	倉田原	遺跡	古墳前期						46
47	倉田原	遺跡	弥生後期~古墳前期	○	○	○	○		47
48	倉田原	遺跡	古墳後期						48
49	倉田原	遺跡	古墳後期						49
50	倉田原	遺跡	古墳後期~古墳	○	○	○	○		50
51	倉田原	遺跡	弥生・平安	○	○	○	○		51
52	倉田原	遺跡	古墳後期						52
53	倉田原	遺跡	平安						53
54	倉田原	遺跡	弥生~平安	○	○	○	○		54
55	倉田原	遺跡	弥生~鎌倉	○	○	○	○		55
56	倉田原	遺跡	縄文~中世	○	○	○	○		56
57	倉田原	遺跡	古墳・平安						57
58	倉田原	遺跡	弥生前期						58
59	倉田原	遺跡	古墳後期						59
60	倉田原	遺跡	弥生・古墳	○	○	○	○		60
61	倉田原	遺跡	弥生						61
62	倉田原	遺跡	弥生後期						62
63	倉田原	遺跡	古墳後期						63
64	倉田原	遺跡	弥生中期						64
65	倉田原	遺跡	弥生中期						65
66	倉田原	遺跡	縄文・弥生・奈良	○	○	○	○		66
67	倉田原	遺跡	先土器~平安	○	○	○	○		67
68	倉田原	遺跡	弥生後期						68
69	倉田原	遺跡	弥生						69
70	倉田原	遺跡	弥生前期末~中期後半	○	○	○	○		70
71	倉田原	遺跡	弥生後期~古墳前期	○	○	○	○		71
72	倉田原	遺跡	古墳後期						72
73	倉田原	遺跡	古墳後期						73
74	倉田原	遺跡	古墳後期						74
75	倉田原	遺跡	古墳後期						75
76	倉田原	遺跡	古墳後期						76
77	倉田原	遺跡	古墳後期						77
78	倉田原	遺跡	古墳後期						78
79	倉田原	遺跡	弥生前期末~中期初頭	○	○	○	○		79
80	倉田原	遺跡	縄文晩期末	○	○	○	○		80

早良平野の弥生遺跡分布

糸島平原地域

(三雲南小路 井原平原遺跡 鍵溝)



福岡平野

(須玖岡本遺跡)

- : 先土器・縄文
- : 弥生前期
- : 弥生中期
- : 弥生後期
- : 弥生終末期
- : 古墳以降

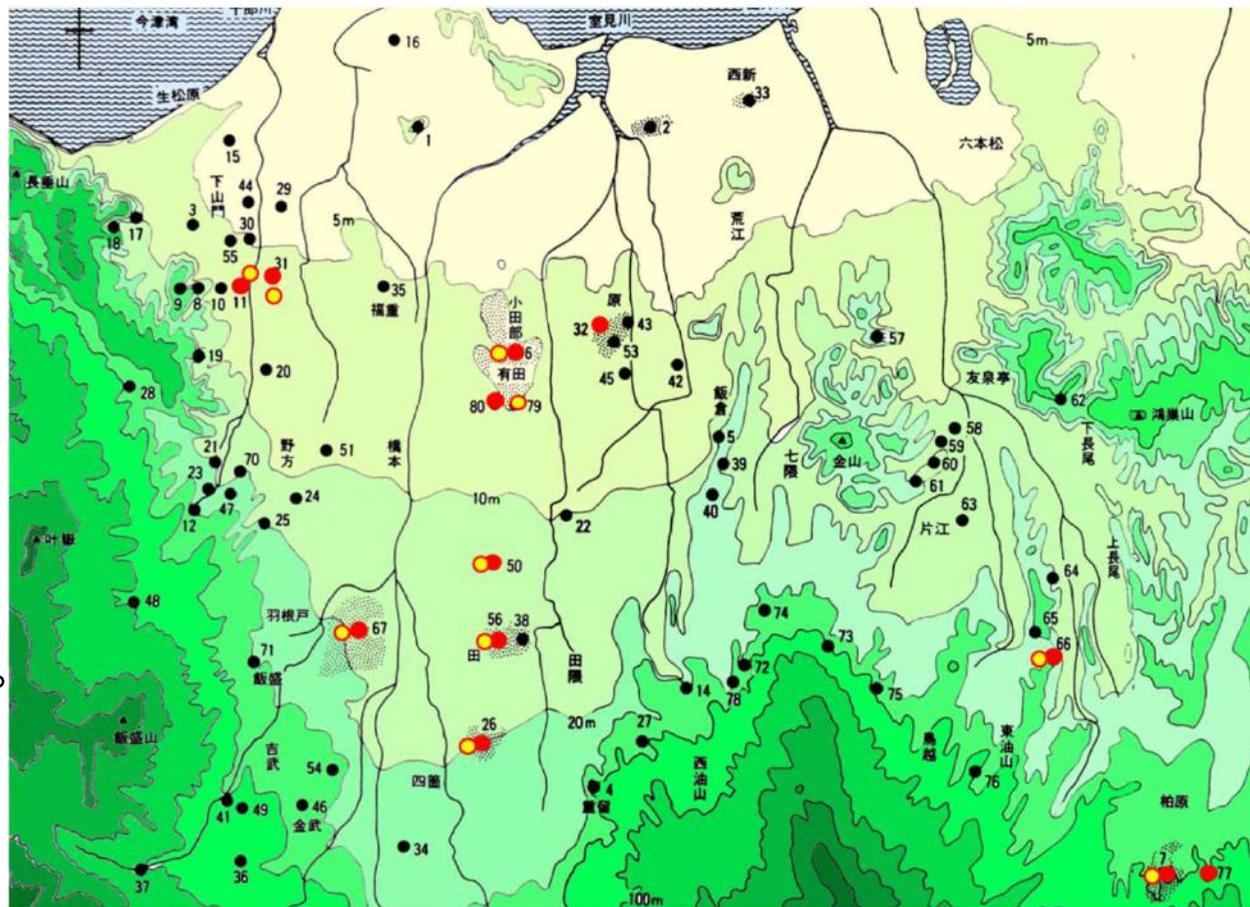
図1 早良平野の主な遺跡



特設展図録
 「早良王墓とその時代」
 福岡市立歴史史料館
 の図に着色

早良平野の弥生遺跡分布を読む

- 弥生前期の遺跡は、何を意味するのか？
 - 縄文時代の遺跡 ● には、縄文以前の遺跡と、一万年を超える縄文時代の長い長い時代の遺跡と縄文晩期の初期水田稲作の遺跡が含まれる。
 - その全ての縄文遺跡(集落)には、弥生前期の遺跡が重なって現れた。(下図を参照)
 - (32.77の遺跡は、縄文のもっと古い時代の遺跡で、弥生時代の痕跡は無い。)
- 弥生渡来民が、弥生前期に早良平野に入った時、その地域の縄文人の集落を襲い、その集落の地に弥生集落を築いたものと考えられる。
- 当時は、山と森林で隔てられていた早良平野は、敵対する縄文人を排除し、渡来した弥生人だけの居住地区となったものと推定。
 - 現在、福岡と早良の間は、高台の住宅密集地続き、二つの地域に別れているとは、全然見えない。
- 弥生前期・中期と集落が平坦な地域全体に広がり、水田開発が進み、豊かな農業地帯となったものと推定。
- 中期には、王が、他の多くの人々とは違った生活を始め、大きな建物を築いた。
- その王墓は、弥生中期に出たが、その後は早良平野からは無くなり、福岡平野に移動する。
- 集落自体は、後期まで継承する。



5) 初期水田稲作民と、後から来た弥生渡来民の一覧表

	初期水田耕作民	弥生渡来民
主要遺跡	唐津・菜畑/糸島・曲り田/博多・雀居・板付	須川・吉野ヶ里・安永田・立石・その他
土器	韓半島の松菊里・固城遺跡で出土する無紋土器 夜臼式土器	遠賀川式土器(弥生式土器) (板付式)
集落 水田 耕作地	環濠集落も一部に見られる。 中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。 米と共に海洋性食料を取っていた。 海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。	環濠(壕)住宅も見られる。 山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する 高度な灌漑技術を駆使した水田(水を抜くと乾田になる) 現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。 海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。
イネの 品種	極短小米 : 韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で 長江下流域(春秋呉の支配地)の松澤・銭山漾遺跡 の品種と同一	極短小米は消滅。 やや長い小粒米 : 全国に展開 韓半島には同一品種のイネはない。 山東半島付け根の地域の焦庄遺跡[徐福村に近い]と同一品種
住居	松菊里型住宅 (方形又は円形)もあるが 従来型の 竪穴住宅 が主体 松菊里型住宅が多い集落も一部にある。	高床式住宅 寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅 (この住宅を誤って竪穴住居として復元している)
墓制	基盤式支石墓 : 支石の下には土壌又は木棺 韓半島南部に多い方式。 中国浙江省にも源流が見られる方式	甕棺墓 が特徴的 初期には、支石墓の下に甕棺を置くことがある 木棺墓・石棺など
武器	青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり	青銅製剣・矛・戈 鉄剣・矛 鉄鏃 連弩
人種	支石墓に眠る人骨は、 低顔・低身長 の縄文人 の特徴を持つ 渡来した民族は、 韓半島に逃避していた 中国難民(春秋の呉の末裔) 人数は数百人規模以内	縄文人の海洋民が、 韓半島に渡来していた春秋呉 の難民と 水田稲作技術を招聘して、 北九州に殖民したもの。 主体は 縄文人の海洋民 高身長・長頭・シヨベル型前歯 (上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ) 中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似 韓半島人にやや類似

初期水田稲作民と弥生渡来民

- 土器が異なり、米の品種が異なり、住宅が異なり、墓制が異なる。人・人種も異なる。
- 初期水田稲作を行った人は海洋性の縄文人。
 - 朝鮮半島には、中国・春秋戦国の呉の難民が移り住み、水田稲作を行っていた。
 - その難民と水田稲作技術を招聘し、北九州で初期水田稲作を開始した。
 - 海岸沿岸や河口に近い河川沿いの水田耕作の適地に集落を作り、
 - 呉の稲(米)「極短小米」を栽培し、呉の墓制の支石墓を取り入れた。
 - 住居は、一部に松菊里型住居を取り入れたが、多くは従来の竪穴住居で暮らした。
- ✓ 春秋戦国の呉の難民が契機となっているので、水田稲作の開始時期は、呉が滅んだ紀元前473年以降となる。
- 弥生時代以降に日本全土で広がる弥生人
 - 二次の渡来以来一気に広がった。
 - 海洋性縄文人が水田開発した集落は、勿論、取り込んだ。
 - 海に近い処、河口に近い河川沿いは勿論、内陸の平野部や、河岸段丘など耕作地域を広げ、日本全国に拡大した。
 - 米の品種は、彼らが渡来時に持参した「やや長い小粒米」だった。
 - 「極短小米」は継承しなかった。
 - 縄文人達が、陸稲として栽培していた熱帯ジャポニカ米は、水田稲作時にも栽培され、「やや長い小粒米」と混在した。
- 武器は、
 - 青銅製の銅剣・銅矛・銅戈に加えて、
 - 鉄製の剣、鉄鏃そして連弩まで持ち込まれた。
 - 海洋性縄文人との熾烈な戦いのために、北九州に導入され、有効に使われた。
- ✓ 強力な武器の導入は、弥生時代中期・後期の戦争にも、影響を与えたものと推定する。

6) 初期水田稲作民と弥生渡来民について

初期水田稲作を始めた人々と、後に弥生時代を築き上げた弥生人＝倭人との間に、大きな隔たりが存在する。

- 従来は、菜畑遺跡で水田稲作を始めた人々が、そのまま、弥生時代を築いたかのように説かれているが、実際には、主体となる人々も、一方は縄文人で、他方は弥生人で、骨格も文化も異なる。

この時期に何が起きていたのか。一連の現象・事件を、時間軸に沿って、推察する。

- 縄文時代の晩期には、北九州に西北縄文人が住み、海洋の民として、帆船を操り、
日本国内だけに留まらず、朝鮮半島までを行動範囲としていた。
 - 朝鮮半島には、春秋戦国の呉の難民が来ており、極短小米による水田稲作を行い、青銅器を使い、支石墓の習俗を持っていた。
 - 西北縄文人は、その呉の難民を招聘し、水田稲作を北九州で試み、呉の技術・文化の習得を行った。
 - 米は呉の難民の「極短小米」を種もみとして栽培した。それが菜畑遺跡などの最初期の水田稲作遺跡となった。
 - 招聘した「呉の難民」の数は左程多くなく、主体は西北縄文人であった。
- 初期水田稲作民は、海洋民の伝統を受け継ぎ、備蓄の可能な米の外に、海産物を食料とする半農半漁の生活パターンを保っていた。
 - 北九州各地に広まったが、それだけでなく、瀬戸内海沿岸から大阪湾まで、散発的に広がった。
 - いずれの遺跡を見ても、臨海地区に存在し、半農半漁の生活パターンであったと推定する。
- 初期水田稲作民が平穏に暮らしていたある時、突然に、別の集団が、船を連ねて渡来してきた。
 - その集団は、水田稲作をベースとする集団で、水田稲作の好適地に上陸し、開拓を始めた。
 - 西北縄文人達は、やがて、その事実を把握（この項は一般的な推測）
 - いずれ自分達が広めようとしていた地域が、占拠されたことに腹立ちを覚え、
 - いくつかの小競り合いが起き、対立が深まった。
 - 西北縄文人達は、集まり、呉の難民から習得した武器や戦法を使い、渡来した集団の開拓地を襲った。
 - 襲撃した集落の一つが山口県土井ヶ浜で、多数の渡来民を虐殺し、集落を破壊した。
 - 土井ヶ浜では、襲撃を受け、戦った男共が殺されたあと、
 - 避難していた女たちが戻り、切られた首を集め、浜辺に並べ、葬ったものと推定。
- ✓ 土井ヶ浜以外の場所でも、襲撃が行われた可能性は大きいと考えるが、
 - 土井ヶ浜のような保存に好条件では無い普通の場所では
放置又は埋葬された遺体・遺骨が、後の時代まで残らず、遺跡として見つからない。

- 多数の集団で来ていた弥生渡来民達は、この先住民の海洋性縄文人との戦争を知り、憂慮した。
 - 縄文人の集団が、中国の青銅の武器や戦術を使う集団とは思わず、想定外の事態に陥ったものと推定する。
- 渡来人集団は、
 - 「何らかの方法」で、最新の武器を調達し、兵士を集め、反撃体制を整えた。
 - 初期水田稲作の集落の全てを、計画的に襲った。
 - 戦略を持った戦争行為と云える。
 - 渡来人集団は、全ての縄文人主体の初期水田稲作集落を襲い、集落を奪取し、集落と集落民を支配下に置いた。
 - 襲撃された縄文人の人々は、皆殺しにされたのではなく、生き延びた人が多く居たものと推定できる。
 - 「◎弥生土器化した突帯文式土器」は、弥生渡来人の支配下に入った縄文人の女性が作った土器と考え、生き残った縄文人が居たことの証拠となる。
 - 弥生渡来人は集団で渡来したが、開拓を行い、生活を安定させるには、多くの人手が必要で、縄文人を殺さず、中に組み込んだものとも、理解する。
 - 渡来弥生人達は、
 - 危険な西北縄文人達の集落のすべてを奪い取り、自分達の集落とした。
 - 稲作の品種は、自分達が栽培に扱い馴れている(食べ馴れている)「やや長粒米」に切り替え、
 - 住居・土器等も自分たちのものに切り替え、弥生の集落に作り替えたものと推定する。
 - 墓地は、
 - 縄文の墓地を取り壊すことなく、墓域を広げ、死者を自分たちの埋葬方式の甕棺で葬った。
 - 但し、支石墓に関しては、
 - 弥生渡来人の人骨の形態が類似すると云われる 東シナ海から黄海沿岸の民族:東夷人の共通の埋葬方式の一つであったため、
 - 短期間、踏襲したケースが有ったものと推測する。
 - (中国の海岸沿いの甕棺埋葬地帯では、甕棺と支石墓が弊立している。)
 - 米作
 - 西北縄文人の支配していた北九州沿岸も渡来弥生人の支配下に入り、
 - 四国・本州全土に渡来弥生人が栽培した温帯ジャポニカ米の「やや長粒米」が拡散した。
 - 縄文人が、古くから陸稲として栽培していた熱帯ジャポニカ米と共存する形となり、
短期間(凡そ200年間)に水田米作を本州北部(青森県)まで、一気に広げること成功した。

IV. 弥生時代の始まりについて:結論

- 国立歴史民俗博物館(歴博)の提言する「弥生時代の始まりは500年遡る」と云う説について記した。
- 歴博が、「海洋リザーバー効果影響の可能性の有る試料」は測定の対象としてこなかったと断言したが、
 - その試料が出土した4つの遺跡「菜畑遺跡、梅白遺跡、雀居遺跡、那珂君休遺跡」と、その他の遺跡も、全て、古地図を検証すると、臨海地帯に存在し、海産物を多く食料としてきた可能性が高いことを実証した。
 - ✓ 水田稲作に係る大阪府・牟礼遺跡で、縄文土器・突帯文土器・弥生土器及び堰の木杭と云った一連の試料の測定結果を検討した。連続した年代の順序が乱れ、計測結果に大きな不具合が有ることが判った。そこでも、海洋性リザーバー効果の悪影響が、改めて指摘される。
 - ✓ 従来の歴博の論文では、「500年遡る」ことに関わる試料についてだけ、個別に公表している。発表方法を変えて、該当する遺跡について、縄文時代から、突帯文式土器の山の寺式時代、同・夜臼式土器時代、遠賀川式土器の時代など連続する各時代の試料を測定し、並べて提示することが、必要と考える。
- 不具合の指摘だけでは、歴史的事実が見えないため、弥生時代の始まりの時期の歴史的事実を明らかにした。
 - その結果、水田稲作の日本への渡来は、二つの時期に、異なった人々と技術で、行われたことが判明。
 - 最初の(一次)水田稲作を導入したのは、海洋民である西北縄文人で、集落は全て、臨海地帯に存在した。海産物を多く接取する生活習慣を持っていた。食事に使われた土器には、海産物が付着し、土器付着物を試料として計測した場合には、海洋性リザーバー効果が発生することになる。
 - その集落を奪取した弥生人も、海洋民族で、海産物に依存する生活習慣を持っていた。
- 一次(最初の)水田稲作が導入された時期：
 - 春秋戦国の呉の難民とその技術に関わることから、呉が滅亡した紀元前473年以降のことと推定される。
 - これは、菜畑遺跡が発見された頃に言われた年代に合致する。
 - 従って、『弥生時代の始まりは500年遡らない!』
- 次の弥生人が渡来した時期：
 - 弥生土器・遠賀川式土器の年代から推定された紀元前3世紀が妥当と推定する。

